

---

# Muv-luvに**来た**転生者（笑）

ザヴァーン軍曹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

M u v - l u v に来た転生者（笑）

### 【Nコード】

N 2 2 1 9 M

### 【作者名】

ザヴァーン軍曹

### 【あらすじ】

みんな〜ひろみちお兄さんだよ。サーセン、嘘です。こんな性格の男がマブラヴの世界に光をとます！？頑張れ俺、負けるな俺！みたいな乗りです。

## 第1話 俺、死亡…って、え！？（前書き）

ども！ザヴァーン軍曹っす！

これはいわゆる処女作っす！

駄文ですけど堪忍してください！

マブラヴオルタのゲームは一回やって友達に貸したら壊されたんで知識は曖昧っす！

それでもいい人だけどうぞ！

最後に、ゆとり？なにそれおいしいの？

## 第1話 俺、死亡…って、え!?

「フツ… やっちまったぜ」

空中に浮かびながら遙か下のグチャグチャになった死体を見つめながら呟く。

は… いみんな元気かな？ 桜井 連で…す

…… サーセン、ちょっとテンパってるもんで。

だって俺、死んだんだよ!？ あのグチャグチャな死体、俺なんだ

つて!!

「シャレにならんぞこれ……」

俺が絶望の声を上げた瞬間

「はい、今まで人生お疲れさん。そしておめでとう。君は選ばれた」

「え？」

杖持つてロープ来てて白髪にしろひげをかなり伸ばしている、爺さんが声を掛けて来た。

驚きのあまり、気の抜けた声で返事をしちゃったけど……。

「え、選ばれたって？ それにあなたは誰ですか？」

ちゃんとこの爺さんの言葉は聞いていた。

爺さんは俺の声を聞くとその長い白い顎鬚を触りながら声を上げた。

「ワシか？ ワシはこの辺の世界担当の神じゃ」

「か、神!？」

そんな信じられるかい! と思ったが、こんな状況(下で俺死んでる。+空中に浮いてる+爺さんも浮いてる)では信じるしかないな。

「うむ、実はの……死んだばかりで悪いんじやが、君には行ってもらいたい世界があるんじや」

「行ってもらいたい世界? 日本語でおk」

「いやの? ついさっき思ったんじやよ。決まったレールが敷かれておる世界に小石をポンツと投げ入れたらどうなるのかの? と」

石を投げ入れるそぶりをしながら爺さんは続ける。

「だから偶々その瞬間に死んだ君にその小石役をやってもらおうと思っただけ」

「つまり……どういうことだってばよ?」

「うむ……君の解る言葉で言うなら……転生?」

「て、転生とな!？」

聞き慣れ過ぎたその言葉に必要以上に反応してしまう。

どっかの誰かなら『仕方ないね』と空耳を聞かせてくれるだろう。

「おお、結構乗り気じゃないか！ いいぞいいぞ、その意気だ！」

「ち、ちなみに行かせてもらえたらどういう所に……？」

俺がちょっと期待を含んだ声を上げると、爺さんは口をおかしそうに歪めて言った。

「マブラヴオルタネイティブ……じゃよ」

「は……？」

時間が止まったかのように思えた。

マブラヴのオルタ。

聞いたことはある。超凶悪な地球外生命体により人類が絶滅一步手前まで追いやられる話。

ロボットに乗り、勇敢に戦うが結局ほとんど死んでしまった作品。  
やった人が皆口をそろえて言う事は、『神』。

そんな事はどうでも良い。  
つまり俺が何を言いたいかと言うと……

……こええええええ！　ちよゝこええええええええ！  
ちよつと待つてよ！　そんなの怖すぎだろ！  
むしろもう一回この世とおさらばするわ！！  
やめてゝ俺のライフはもう0よゝ。

そんな俺の気持ちを悟ったのか、爺さんはまた口を歪ませて言った。

「残念ながら君に拒否権は無いぞ？」

「え！？」

「君にはワシの暇つぶしに付き合ってもらっくんじゃからな」

「暇つぶし……？」

「そう、暇つぶしじゃよ。神様は退屈なんじゃ」

なんだこのクソジジイ。

自分勝手すぎだろ。神様信じてる全世界の人に謝れや。



「……一つ聞いても良いですか？」

「ん？ なんじゃ？」

少しの怒りを含めた俺の言葉に何食わぬ顔で聞き返す神。  
今俺の顔は怒りに歪んでんじゃないだろうか。

「なんで俺なんですか？」

「特に意味は無いぞ？」

「は？」

「お主は一々何かのドラマや映画に『なぜこいつが主人公なんだろう？』なんて考えるのか？ 違うじゃろ？ お主は勘違いをしておる。お主だから選ばれたのではなく、選ばれたのがお主なんじゃ」

ドヤ顔で言う神（笑）。

よく分からないが、俺はもう逃げられないらしい。

「ハア……もういいです。行きますよ」

「まあまあ。心配なのは分かる。じゃからおぬしにビークサプライズじゃ！」

諦めの声を上げると神（笑）は俺の心を察したのかそう言つと手に持っている杖を俺に振りかざした。  
すると杖の先端から光の粒子が出始め俺を覆う。

「な……！こ、これは………！？」

光が晴れると俺の姿は

「アスラン・ザラになっちやる！？」

そう、ガンダムSEED DESTINYの影の主人公のアスラン・ザラになっていた。（大人っぽい18歳モード）

「どうじゃ！見た目だけじゃなく、声、身長、そして能力まで丸々コピーしたんじゃぞ？」

「の、能力まで！？」

またもやドヤ顔で言う神（笑）の言葉に思わず声を荒げる。  
つまり……コーディネーター？ SEED？ 天才的な操縦技術？  
やだこれお得。

「あ、ありがとうございます〜！」

絶望の中にも一筋の希望の光が見えて来た！  
もう死ぬなんて真っ平御免なんだ！

「これが神クオリティさ！ さらに！ インフィニットジャスティス〜」

ドラえもん口調で言うと、またも光が集まり、晴れると俺の大好きなMSインフィニットジャスティスが目の前に出現した。

「すげえ……！」

その光景に思わず言葉を漏らす。  
ムカつく奴だと思っていたけど、こんな事が出来るのは本当に凄いと思う。

「…あ、でも予備やらなんやらはいつたいどうすれば…？」

「んーパワーは核機動じゃから無限だし、ビーム兵器はそのパワーからエネルギーをもらっておるのだし？ そうじゃのー消耗品はおぬしが目が覚めた時、コンテナを近くに置いておくんでその中のを使え」

俺の言葉に、髭を弄りながら答える神。  
少しカッコいいと思ったのは秘密だ。

「よ、良くわかんないけど一応了解です！」

「まあいいわい。そろそろ出発じゃ、準備はいいかの？」

「はい！」

「目が覚めたらジャステイスにのつてると思うから。それと何かあったらわしの事を呼べ。ワシらの掟に引っかからない程度に手助けしてやるわい。それじゃ、行ってこい！」

途端に俺の体を浮遊感が襲う。

慌ててしたを見ると、大きな穴があいてました

「って、アッー！」

こうして俺の新たな人生が始まった。

第1話 俺、死亡…って、え！？（後書き）

どもっす

いかがでしたでしょうか？

前書きに書いた通り曖昧なんのでいろいろ教えてくれると嬉しいです

^^

では！

キャラ設定（前書き）

タイトルどうりっす

## キャラ設定

名前 桜井 連 アスラン・ザラ

年齢 18

容姿 アスランと一緒にのイケメンさん。

性格 軽い、お気楽、あほの三拍子。だけど一応ハッピーエンドを目指す。

死んだあとに何故か神に選ばれ、世界を救うことになった男。

死んだときにアスラン・ザラの力とMSインフィニットジャスティスをもたらった。

MS運転技術は白銀をも凌駕する。さらにSEED因子を持ち、秘めたる力を持っている。

また機械関係はお手の物で、整備ならそこらへんの整備士に負けない。（ハロも作れることからかなりの腕前だと言える。）



## ZGMF-X19Aインフィニットジャスティスガンダム

ギルバート・デュランダルに異を唱えるラクス・クラインを旗頭とする旧クライン派の手により、ZGMF-X20A「ストライクフリーダム」と同時期に開発された機体で、セカンドステージシリーズMSのデータとZGMF-X09A「ジャスティス」のデータを掛け合わせ、宇宙に隠されたファクトリーにおいて完成させたものである。

「ストライクフリーダム」同様に新型核エンジンの搭載と白銀の新式フレームの採用により、「ジャスティス」の数倍の戦闘力を獲得している。

全高：18.9m

重量：79.67t

パイロット：アスラン・ザラ

### 【武装】

頭部機関砲×2：MMI-M19L 14mm2連装近接防衛機関砲

胸部機関砲×2：MMI-GAU26 17.5mmCIWS

脚・脛部ビームカッター×2：MR-Q15A グリフォンビームブレイド

腰部ビームサーベル×2：MA-M02G シュペールラケルタ

リフター部ビーム砲：MA-6J ハイパーフォルティスビーム砲

リフター部ビーム砲収納時の短ビームサーベル×2：MA-M0

2S プレフィスラケルタ  
リフター主翼ビームカッター×2： MR-Q17X グリフォン  
2 ビームブレイド  
リフター先端ビームサーベル×2： MA-M02G シュペール  
ラケルタ  
ビームライフル： MA-M1911 高エネルギービームライフル  
ビームブーメラン×2： RQM55 シャイニングエッジ ビー  
ムブーメラン  
ビームシールド： MX2002 ビームキャリーシールド  
シールド内アンカー： EEQ8 グラップルスティンガー

## キャラ設定（後書き）

こんな感じです^^

ではこれからもよろしくお願いします！

## 第2話 アスランでございます！（前書き）

タイトルに意味はありません！

## 第2話 アスランでございまゝす！

「知らないコックピットだ…」

はいそこ！当たり前だと言わない！

なんか言いたくなる気持ちわかるでしょ？

わかんない？

そ。

「というか本当に来たんだな…」

マブラヴの世界。

BETAと戦う死の世界。

…やべっちょっとちびつた。

「そっぴやここどこだ？」

まあ原作知らんからどこもくそもないんだけどな

とりあえずジャスティスを動かしてみつか。

「うーん、と？このボタンで起動して…お！起動したした」

俺がボタンを押すとウィーンなんて音を出してジャスティスが起動した。

…こいつ、動くぞ！ 某初代ニュータイプ

「で、このレバーが操縦桿で…おお！分かる、分かるぞ！」

どうやらアスランの記憶が俺の中にあるようで、動かし方が簡単に分かった。

「いけるぞ〜。ん？レーダーに反応？人、だな」

コックピット内のカメラで下を見ると1人の男が立っていた。

俺はスピーカーを使って男に話しかけた。

「こちらはアスラン・ザラだ。貴官は何者だ」 かつこつけ

すると男は驚いたように声をあげた。

「うお！え、衛士が乗ってんのか！？」

「名乗れ、貴官は何者だ」

「え、あ、お、俺は白銀 武です！」

え？白銀、武？

主人公キター！

まさかのエンカウント！？

ド クエの勇者様も真っ青だよ！

「あ、あのー？（やっぱり俺の『あの』世界と違う！あの時あったのは戦術機が一機、それも壊れた奴だったはずだ！）」

「あ、ああ。すまない」

「アスランさんはどうしてこんなところに？」

んーホントの事いおつかなく？

どうせばれるんだしねー。

でも死んだつてのはちょっとやだから俺も飛ばされたつていった方がいいな。

「少し待ってくれ。今降りる」

コックピットから降りて俺は白銀武と向かい合った。

ウホッ！いい男！

…サーセン、自重します。

「あ、あのそれで…（すげえ。モデルみたいな人だ）」

「あー肩っ苦しいからため口でいいよ。同い年だし。さっきのはちよつと見栄張つて言っただけだから」

「あ、ああ」

「それで俺の事なんだけど…驚くなよ？」



く説明中く

「ええええええええ！？アスランもこつちの世界に飛ばされた！？」

「あゝだからうるさいって」

俺が違う世界から来たと聞いて武は驚く。

まあ普通の反応だよね。

「じゃ、じゃあこの戦術機は……？」

「戦術機じゃないって、MS。俺の世界の兵器さ」

俺の世界じゃないけどいいよね。

似たようなもんだし。

「MS？兵器？」

「ああ。俺の世界じゃこれに乗って戦争してたんだ。人同士で」

「人同士で…」

「やっぱりこんな世界を経験しちゃうと人同士で争そうなんて馬鹿らしいよな？」

「そうだな…」

見るからに落ち込む武。

うん、いい子や。

戦争してる奴らに見習わせたい。

「で？これからどうすんだ？」

流石に進まないのどうするか聞くことにした。

「そうだった！基地に行かなきゃ！」

「基地？」

「ああ。横浜基地だ」

「ふん。俺も行っていいのか？」

「ああ！あたりまえだ！」

「うし、じゃあジャスティスに乗ってくれ」

「ジャスティス？」

「このMSの名前だ。インフィニットジャスティス、果てない正義  
つてね」

「いい名前だな……」

「さんきゅ。とりあえず行こうぜ」

俺と武はジャスティスに乗りこんだ。

ジャスティスのコックピットは広く、三人は入れる。

二人乗ったくらいじゃどうってことないぜ！

…… あっそついやなんかコンテナがあるっていったな。

んー、お！あったあった。武の家のすぐ隣に巨大なコンテナがあるじゃん。

俺はそれを持ちあげる。

よし、これで行けるな。

「武、横浜基地の場所わかんたろ？」

「ん？ああわかる」

「んじゃ案内よろ」

「めっちゃ近かったな」

近くにジャスティスを止めて、途中から歩いた。  
というか最初から乗るひつようなかったっぽい。

「なあ武」

「なんだ？」

「なんか門番っぽいのがいるぞ？」

「いるな」

「どうする？」

「とりあえずいく」

わゝ短絡的ゝ。

だけどそこに痺れる憧れるううう！

「おい、こんな所で何をしてるんだ？」

「外出してたのか？」

武と話しながら歩いてたからか気がつくともう目の前に二人の衛士だっけ？が立っていた。

てか銃持つてんだけど…。

こわ！

「あ、ああ」

「こりゃまた物好きが居たもんだ。」

いやいやいや！物好きでかたずけられる問題なの？

なんの装備も無しに外出歩いてんだぞ？

馬鹿なの？死ぬの？

「通るんだつたら許可証と認識票を掲示してくれ。」

そんなのないよ！俺オワタ。

「頼む！夕呼せんせ…じゃなくて副司令に会わせてくれ！」

俺が＼（＾o＾）／してると武が声を荒げた。

「副司令に？」

「少し待て。今聞いてみる」

聞いてくれるの！？どんだけサービス精神旺盛だよ！

普通に考えてそれはいけない行動でしょ！？

不審者だよ！？許可証も認識票も持っていないのに？

「~~~~」

そんなこと考えてる間に1人の男は電話で聞いているようだ。

…なんかだめっばい。

電話終わった人なんか顔が怖いもん。

ガッ！

「…！？いきなりなにすんだ！？」

案の定かよ！てか銃でいきなり殴るってひどくね？

どんだけ血気盛んだよ！小学生でももう少ししましたぞ！

「香月副司令は貴様たちなど知らんそうだ！」

「立て！貴様たちを拘束する」

なんか腹立つな。

ここいらでいっちょアスランパワー見してやっか！

「さぁおとなしく来るんだ」



肩を掴まれた俺は、

「だが断る」

その手を掴み、足払い。

「は？」

そのまま馬乗りになり関節を決める。

「い、いでででで！」

「き、貴様！」

もう一人が銃を突き付けようとした瞬間、

バン！

俺が馬乗りになっている方の男の銃でもう一人の銃を撃ち落とす。

「うぁ!？」

そのまま銃を突き付ける。

「チェックメイト、だな（決まった）」 かつこつけ

「ア、アスラン…お前強いな」

「だろ？」

パチパチパチッ

「「!？」」

俺が武に褒められて浮かれていると突然拍手が聞こえた。

「あんた、やるじゃない。見事だったわ」

拍手をしていたのは……わお！超グラマーな美人！

「ゆ、夕呼先生！」

突然武が叫んだ。

夕呼先生？この人が副司令？

「……？……あたし教え子を持った覚えはないわよ？」

そろそろだww。

てか夕呼さん！俺だー！結婚してくれー！

## 第2話 アスランでございます！（後書き）

どうでしたでしょうか？

最初に言った通り曖昧なんでアドバイスや感想をくれるとうれしいです^^

（感謝コーナー）

焼肉定食様、マサト様

感想&メッセージありがとうございます！

これからもよろしくお願いします！

では！ノシ

### 第3話 漫画版の夕呼さんの胸のでかさは異常（前書き）

お久しぶりどす！ザヴァーン軍曹っす！

久しぶりに執筆したから勘がなくなっていやがるぜ…。

どうか見捨てないで！

### 第3話 漫画版の夕呼さんの胸のでかさは異常

「なるほどね…」

俺たちは今、執務室にいる。

あのとき、夕呼さんがなんとか場を収めてくれたからね。

まあ俺が謝りまくっただけなんだけどね

とにもかくにも武の説明によりなんとか理解してもらえたようだ。

因果律量子論？そんな感じだっけ？

なんか聞いた話でここには人の心を見れるみたいな女の子がいるって聞いてたからアスランの戦いの記憶でも見てかつこいいとこ見せようとしたら、仲間が死ぬとこばっかで鬱になって話聞いてなかったんだよね〜。

自重自重。

みんなの分まで戦うぞ〜！って念じとこ。

「信じてもらえたんでしょうか…？」

「そうね。少なくとも信じるに足る理由はあるわ。あたしにしか分

からない理由だけど」

「？」

「いや、なんでもないわ。…で？あんたは？」

「え、あ、はい。アスラン・ザラです」

「名前じゃないわよ…。あんたはなんなの？」

なんなの？

どうしよ…なんて言やいいんだ？

素直に死んできましたって言うか？いやいやそんなことしたら……

~~~~~

「死んできました！」

「ならもう一回死ね」

Bannon!

BAD END

~~~~~

なんてことにもなりかねん！

いや、大丈夫さ！夕呼さんがそんな短絡的なわけがない！

あ、でももし仕事のストレスでイライラしてたら…。

くそ！こうなったらアスランの、ガンダムSEEDの世界の話を話す！ジャステイスのこともあるし！

でもウソってばれたら最悪殺されるよな…。

ええい！逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！ 某  
新世紀の初号機パイロット

桜井 連、逝きます！（誤字にあらす）

「俺は武とも違う世界から来たんです」



「？」

「俺の世界は戦術機のような機体……まあMSモビルスーツって言うんですけど、それで人同士で戦争してたんです」

「人同士で、ね」

「はい。まあ『純粋な』人同士ではありませんが」

「？」

「実は……」

（説明中）

「……つまり、あんたはコーディネイター、遺伝子をいじって生まれたヒトなのね」

「はい」

俺はあらかじめ説明した。

ナチュラルやコーディネイターのこと。

それが発端になった二度の戦争の事。

てか、アスランの感情も少なからず俺の中にいるからいちいち泣きそうになる。

「アスラン…お前…」

武はめっちゃおどろいてんな。

でも、武ってキラ・ヤマト…ゲフンゲフン！

「ふ〜ん…でも証拠がなきゃね〜」

「ありますよ。必要ならすぐにでも見せましょう」

やっと食いついてきたか…。

これでジャスティスを見せれば万事OK！

「！！？あるの？どこに？」

「この基地から少し離れたところに俺のMSを待機させています。それを持ってきたいんですけど…」

「そう、そういうことなら…少し待ってなさい」

そういうと夕呼さんはどこかに連絡を取り始めた。

そっぴゃ戦術機ってどのくらいのスペックなのかな？

ザクやジン…じゃあ流星に弱すぎか？シグーくらいか？

ゲルググやゲイツだと強すぎるしな。

「白銀、あんたには前の世界と同じく207衛士訓練小隊へ編入してもらっわ」

「ありがとうございます！」

いつのまにか連絡し終えた夕呼さんが武にそう告げた。

「あとはどうすればいいかは、あなたしだいよ」

「はい！」

「武、がんばれよ」

「ああ、アスランも！」

そう言って武は出て行った。

「あの、それで俺は？」

「少し待ってなさいって。いくらなんでもあんた1人で取りに行かせるわけにはいかないでしょ？それにあんたの言ったことが本当ならそのMSはこっちじゃオーバーテクノロジー、機密にしないとなんだからあたしが一番信用できる人を呼んでるのよ」

「なるへそ」

「へそ？」

確かに。

そりゃそうだ。

夕呼さんは頭の上に？マークを出していたが、言いたいことを言い  
終えたからかソファアに座った。

……シーン。

く、空気が重い…。

「あの、夕呼さん」

「なに？」

「結婚してください」

「ブー！」 コーヒーを吐き出した音

だから和ます為に言っちゃったんだよね

「グスン…」

「何で泣くのよ…」

あのあと思いつきりビンタされて俺は部屋の片隅で体育座りをしながら泣いていた。

俺はただ和ませようとしただけなのに…。

「失礼します」

「…つと、来たわね」

ん？呼んでた人が来たのか。

うはっww超美人wwww

って！？こ、このひとは！！

「突然で悪いんだけどこいつの護衛、監視をして頂戴『まりも』」

「こいつ？」

「どうも！アスラン・ザラです！」

ガシツ！

俺はすぐさま立ち上がり、まりもさんの手を握った。

「え、あ、神宮寺まりもです…（モデルの人…？）」

「あゝ、まりも？（切り替え早！）」

「は、はい？」

「まりも？今はいいのよ？」

「で、ですが」

「いいのよ？」

大事なことなので二回言いました。ですね？わかります。

「…はあ、わかったわよ。で？この人の護衛兼監視を？」

「ええ。結構重要な人物よ？」

「何が…と聞いても教えられない、か」

「そういうこと」

ん〜。まさか神宮寺まりもさんだとは…。

原作を知らない俺でもわかるあの有名な『事件』の被害者か。

でもわかるぞ！BETAよ！こんなに美人だったらぱっくりいきたい気持ちもわかる！

やらせないけどね

「では…ザラさん？」

「アスランでいいですよ…。ザラさんなんて語呂悪いですしね」



「そうですね。じゃあアスランさん？行きましょう」

「はい」

「あゝちょっとまって」

俺とまりもさんが執務室から出ようとする、夕呼さんが止めてきた。

「なに？」

「あんたたちが帰ってくる、ハンガーを開けとくからそこに入れてね」

「ハンガーを？どうして？」

「アスランにでも聞きなさい。でも、アスラン…言っている事と悪いことくらいわかるわよね？」

「は、はいはいはい！..」

そう言った夕呼さんの顔が一瞬般若に見えたのは気のせいだよね？

- - - - -

「ふう…社？」

「…はい」

「あの男…アスランはどうだった？」

「とても…悲しい人でした」

「そう…」

アスラン…か。

どれだけの物を失ってきたのかしらね…。

- - - - -

「ぶえつくしよん!!」

「だ、大丈夫ですか？」

ウィー、風邪でも引いたかな？

まあコーディネイターだから大丈夫だとは思っけども。

「ええ、大丈夫です。それより敬語なんて使わなくていいですよ？  
俺の方が年下なんですし」

「え？いえ、ですが…」

「俺の方が年下なんですし」

大事なことなんで二回言いました。

「はあ…あなたも強情ね？わかったわ」

「ありがとうございます！」

俺たちは今横浜基地を出て、ジャスティスを待機させているところまで歩いている。

結構近くに止めていたのもうすぐ着くだろう。

「それで？どこに向かっているの？」

「あゝっと、俺の戦術機を取りに…」

「戦術機を？どういうこと？アスランは軍人なの？」

「いや、まあ軍人っちゃあ軍人ですけど…そこんこは」

「それは…教えられないってこと?」

「まあ、すみません」

こんないい人を騙すのは気が引けるけど、夕呼さんに殺されるよりはマシだ。

「別に謝らなくて…も…!？」

あゝ話している間に『目的地』に着いてたかゝ。

うはっwwびっくりしてるまりもさんカワユスww

「こんな…これは…」

「はい。これが俺の戦術機…ZGMF-X19A『インフィニットジャステイス』です」

「これが…戦術機?こんなの、見たこともない…」

「まあ積もる話は後で…とりあえずコックピットへ」

「え、ええ……」

俺はあらかじめ垂らしておいた搭乗用コードにまりもさんと掴まってコックピットに入った。

この時、まりもさんのおっぱい……ゲフンゲフンが俺に当たって役得！  
！とか思っていたのは内緒だ。

「すごい……普通の戦術機とは全てが違う」

これがコックピットに乗ってからのまりもさんの最初の言葉だった。

「あはははは……とりあえず俺の上に座ってください。危ないですよ？」

ホントは座んなくとも安全だがそんな勿体ない事できるか！！

まりもさんのお尻の感触を味わうんじやい！！

「え、上に？」

「はい。上にです」

「で、でも広いし…」

「上にです」

大事なことなので三回言いました。

「それに神宮寺さんのような綺麗な女性を怪我させたら末代までの恥ですからね」 爽やかスマイル

「あ、ありがとう…／＼／」

お！信じてくれた！俺のキモスマ（キモイスマイルの略）にもいやな顔しないなんて

どれだけ心広いんですか。

「じゃ、じゃあ…」

そう言ってまりもさんは俺の上に腰かけてきた。

フニユ

ウッハー！！や、やわっけ〜！！だけでもたるんでるわけでもなく…。

こ、こいつはおでれえた。まさかこんなにも破壊力があるなんて…。

オ、オラの股間のテポドンが発射しちまうだ！

「お、重くない？」

「……………」

「ア、アスラン？」

「…はっ！な、なんですか？」

「あ、いや、大丈夫かなと」

「大丈夫っす！気にせんでくだせえ」

「え、ええ…（くだせえ？）」



不味い…このままでは股間が！

急いで基地に戻らねば！

…フツ、認めたくないものだな、若さゆえの過ちとは…。  
大佐  
某仮面

「ではいきますよ」

俺はコンテナを持って基地へと急いだ。

### 第3話 漫画版の夕呼さんの胸のでかさは異常（後書き）

かなりの駄文だ…。

勘を取り戻さなくてわ！

おかしいところがあつたら指摘お願いしますm（——）m

～感謝の広場～

デステイニープランさん、jinnsumiさん、トオルさん、バルコリアさん、七夜さん、マサトさん、トレインさん、感想ありがとうございました！

～元ネタ広場～

逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ、逃げちゃダメだ！

新世紀エヴァンゲリオンより、碇シンジ

やらせないけどね

機動戦士ガンダムSEEDより

クロト・プエルのやられないけどね のオマージュ

…フツ、認めたくないものだな、若さゆえの過ちとは…。

機動戦士ガンダムより

シャア・アズナブル

#### 第4話 たまにはちゃんとしたタイトルをつけようと思ったけどこんなこと書いて

今回は自分でも書いててわけわからんくなりやした。

ご指摘などありましたらお願いします。

#### 第4話 たまにはちゃんとしたタイトルをつけようと思ったけどこんなこと書いて

「間に合っ たぜ…」

なんとか俺は股間の核弾頭が爆発する前に横浜基地に着いた。

事前に夕呼さんが話を通してしてくれたからか、ハンガーには少数の整備士らしき人たち、そして夕呼さん以外いなかった。

「あそこが空いてるからあそこに入ればいいと思うけど…」

まりもさんが困ったように声をあげた。それもそのはず、

なんか夕呼さん含む整備士のみなさんが口を開けてポカーンとして  
いる。

…ああそうか、びっくりしてるんだな。こんな機体見たことないも  
んな。

俺はとりあえずまりもさんに言われた場所にジャスティスを入れ、  
コンテナを下した。

「やっぱりみんなびっくりしてるわね？」

「そうですね。ちょっと待ってください、今あけます」

俺はコックピット開閉ボタンを押した。

ウィーンという音を上げてコックピットが開く。

その音でやっと我に返った夕呼さんがこちらに歩いてくるのが見えた。

「じゃあ掴まってください」

「ええ」

俺は乗った時と同じようにまりもさんを抱きかかえるようにしてワイヤーに掴まる。

やっぱりおっぱい…ゲフンゲフンがアたる。まずい！鼻血出そうだ！  
気合！気合で乗り切るんだ！

「ありがとう、アスラン」

「どういたしまして。それに神宮寺さんを守るためならたとえ火の中水の中ですよ！（キラッ」 爽やかスマイル

「あ、ありがとう…／＼／」

「はいはい…目の前でいちゃつかない」

「い、いちゃついてなどいません！」

いつの間にか目の前に来ていた夕呼さんが不機嫌そうに言った。

というか、整備士がいることに気付いてサラっと敬語を話すまりもさんはさすがだ。

「ふ〜ん…まあいいけど。アスラン、これがそのMS？あと、そのコンテナは？」

「はい。機体名はインフィニットジャスティスです。コンテナは補充パーツです」

「調べさせてもらっけど構わないわね？」

「ええ。といっても多分たいていの事は理解不能ですよ？」

「分かってるわ…だとしてももしかしたらってことがあるでしょ？」

まあそうだけどね。

てか多分ジャスティスのこと調べられたら当分乗らせてもらえなくなるな。

「まりも、あんたはそこでちょっと待ってなさい」

「はっ！」

「アスラン、ちょっときなさい」

「え？あ、はい」

俺はまりもさんに軽く会釈して、夕呼さんについていった。

もしや愛の告白！？ま、まずい！心の準備が！！

「これであんたの事を信じるわ。それであんたの処遇をどうするか  
なんだけど…」



「ガクッ」処遇ですか…うん…」

「あんたも白銀と同じにする？」

武と一緒に？訓練兵からか…。

走ったり、座学したり、走ったり、走ったり、走ったり、……。

…一言で言つと、ダルイ

やっぱ、早く戦術機乗りたいたいな。

「うん……だったらシュミレーターのような物はありませんか？  
そこで試験でもさせてもらえたら…」

「試験？…まあいいわ」

こうして俺はシュミレーターで試験をすることになった。

- - - - -

「なんじゃこらあああ!？」

俺はシュミレーターをするのに必要だと言われて強化装備なる黒いパイロットスーツに着替えたわけだが…。

これはないwww。ガチでwww。

普通でいいじゃん!なんでこんな際どい物なの!?

めっちゃめっちゃ恥ずかしかったけど、ここでもじもじしていたら始まらない!と、渡されたマニュアルに目を通した。うへえかなり違う…。でも基本は一緒!なんとかなる!と意気込んで筐体に入り込んだ。

………すげえ。かつこいい。これは戦場の絆がおもちゃに見えてくるな。

『準備はいい?まりもも見てるわよ?』

「あ、はい！……つてええええ！？」

どうやら俺の心のオアシス、まりもさんも見とるそつだ。

こりゃゝ気合入れんな！

『難易度はどうすんの？』

「よくわかんないんで一番難しいのでお願いします」

『わかったわ：ハイヴ攻略シュミレーションね。機体は不知火。武装は？』

武装？そんなに細かいの？

うゝん：アスランが得意なのは近接戦闘だっけ？まあいいや。

「適当に近接戦闘系が多いのでお願いします」

『わかったわ。準備するから少し待ってなさい』

「ウィっす」

そう言つて夕呼さんは通信を切つた。

……………話し相手がなくなつたら急に緊張してきた。

めっちゃ怖い。失敗したら夕呼さんには罵られ、まりもさんには幻滅されんのか…。

嫌だ、かなり嫌だ。そんなことになつたらわしは自害する所存じゃ。

- - - - -

「（大丈夫かしら…。）ソワソワ……」

「何よ？そんなに心配なの？もしかして惚れた？」

「う、そ、そんなことないわよ！」

「ふん…まあいいわ。さあ、見せて頂戴、あんたの力を」

- - - - -

『準備できたわ。始めるわよ』

「いいですよ」

遂に来た！この緊張感…しょんべんちびりそう。

でも、腹をくくるしかない。日本のオタク舐めんな！！

「アスラン・ザラ、出るぞ！」

これが言いたかった！！ 某ガンダムを抱きしめたくなる人

- - - - -

ハイヴとやらに突入するといきなりレーダーに反応があった。

……キモ！！これがBETA？キモすぎる！！

これは…要撃級？うわ！めっちゃいる！！蟻の巣かよ！！

あゝキモイ！怖い！さっきの決意が一気に崩れさる！！

こうなったら妄想に妄想を重ねた俺の特技なりきり魂だ！この恐怖を跳ね返すには……

「へっ……いくぜえ！BETAさんよお！！」 声が筒抜けな事に  
気付いてない

『！？』

アリー・アル・サーシエス！！

すると要撃級がこっちに気付いたのか、突っ込んでくる。

「あたつかよ！！」

俺は跳躍して回避、そのまま鉛の玉のシャワーを降らせる。

「はは！どうだ？うめえか？」

弾がもつたいないのでそのまま壁をけり、奥に進む。

奥に進めば進むほど、BETAの数は異常になる。

もう足の置き場すらない。

仕方ないのでBETAのど真ん中に降り立つ。

すると同時に、攻撃が来る。

「ところがぎつちゅん！」

それを軽々避ける俺。

やばいやばいやばい！もうアドレナリンが出まくってなにも怖くない。むしろ楽しい。

これが戦争をしてる時のサーシェスの気持ちか！！ トリップ中

.....

「何…これ…どうやってたらこんな動きが…」

「……………」

「夕呼！」

「いいから見てください…！（なんて殺気…これがあのアスラン？執務室でふざけていたアスランなの？）」

「…（アスランは…ジャスティスに乗っていた時の彼はこんな殺気を出す人じゃなかった…そんなにBETAに憎しみを持っているの…！）」

- - - - -

「いつちまいな！」

俺は長刀でBETAを切り裂く。

恐らく半分辺りまで来ただろうか？武装も残り少ない。

けど…

「それでこそ殺しがいがあるってもんだぜ！！ええ！？BETAさんよお！！」



『『……ッ……!!』』

ドガン!!

要撃級の体当たりがかすり、左腕が持っていられる。

「しぶてえんだよ!!」

俺は弾を撃って、そのまま奥に進む。

弾がなくなるのに比例してBETAの数が増えていく。

ガチン、ガチン!

遂に弾切れ、これでもう武装はない。つまり詰み。

くっそ!こうなったら……。

「ただじゃあ死なねえ!てめえも死ねえ!!」

残った右腕でBETAを殴る。殴った瞬間に突撃を喰らう。

……ゲームオーバー。大破。

オワタ……俺オワタ……。

クリアできんかった…。たった三分の二しか進めんかった…。待っているのは夕呼さんとまりもさんによるいじめ、か……。

『……………御苦労さま。出てきてちょうだい』

「…はい」

うゝやっぱり夕呼さん怒ってる？やたらむずかしい顔してたぞ。

俺は鬱になりながらも筐体から降りる。

「……………（ただじゃあ死なねえ、てめえも死ねえ…か。本当に、どんな憎しみを抱いているのかしら…。それにあの操縦技術は…）」

ウギャー！！まりもさんまで痛い子を見る目だー！！

もう死のう…。そうだ…それがいい……。僕は生きていちゃいけない人間なんだ……。

「アスラン、あんたの力、見せてもらったわ」

「…はい」

俺が死ぬ準備を始めようとすると、夕呼さんが話しかけてきた。

嫌味ですね？わかります。

「まりも？こいつが今までどこにいたか分かる？」

「…わからないわ」

「こいつは今まで…そうね、ソ連にいた衛士、アスラン・ザラ中佐よ」

そうそう。いや、夕呼さんの嫌味は一般のそれとは一線を…え？

え？ソ連？中佐？

…おk。状況把握。ソ連というのは違う世界から来たとは言えないからの嘘ね。

でも中佐ってどゆこと？あれでしょ？佐官でしょ？お偉いさんでしょ？

「ほ、本当…？」

ほう。まりもさんもきょどってるよ。

「ええ。あんたより階級断然上なのよ」

「…っし、失礼いたしました！ザラ中佐！今までの非礼、お許してください！」

うおー！いきなりびっくりしたあ。まりもさん、いきなりどしたの？

……………ああ、なるへそ。今まで軽く話してたのが中佐って分かって焦ってたな。

「いや、いいですよ。それより俺も夕呼さんみたいにこういつときは普通でいいですよ？」

「い、いえ…」

「お固い！お固いですわよまりもさん！」

「しかし…（わよ？）」

「うん…じゃあこうしましょう。せめてこうゆつときは、階級な  
しで呼び合いましょう」

「え、ですが」

「ね？神宮寺さん？（キラッ」 爽やかスマイル

「う、はい…アスランさん」

「ありがとうございます！神宮司さん！」

「…です」

「？」

「まりもです…／／／」

「ああ…はい、まりもさん」

やべえ！まりもさんかわいい！！結婚してえ！！

「はあ…もういい？まりも、あんたもそろそろ訓練始まるんじゃない？」

「え、あ！では！アスランさん！夕呼も！」

「あ、はい」

「はいはい、わかったから」

そう言ってまりもさんは走って行った。

因みに走っていた後ろ姿のお尻が動いているのを凝視していたのは秘密だ。

すると、夕呼さんが不機嫌そうな顔をして話しかけてきた。

「どうしたのよ？まりもに惚れた？」

「一億年と二千年前から」

「？」

「もちろん夕呼さんも大好きです」

「-!!--」

バシンッ！

「ハーゲンダッツ!!」 断末魔

初のシュミレーターで精神的にキテいるところに、夕呼さんのベントを食らって俺は踏ん張ることもできず、吹っ飛んだ。

よい子のみんなは真似しちゃだめだぞ

#### 第4話 たまにはちゃんとしたタイトルをつけようと思ったけどこんなこと書いて

………戦闘描写のむずかしさは異常。なら書くなって感じですけど  
(笑)

～感謝～

マサトさん、デステニープランさん、トオルさん、トレインさん、  
んんん(・・)さん、感想ありがとございました！

～元ネタ～

これが言いたかった！

ガンダム00より

グラハム・エーカーのこれがやりたかった！のオマージュ。(多分)

シュミレーター時のセリフ

ガンダム00より

アリー・アル・サーシェス



最後に、キャラ設定と第3話を少し変更しました。サーセン。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思う（前書き）

すみません…遅れました。

理由は…スランプです。orz

でも、嬉しい事も！

30000PV突破！7,000ユニーク突破！ありがとうございます  
ました！！

変な部分や、おかしいところがありましたらどうぞ連絡ください。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思う

「鬼や……。」

俺は今ジャスティスのOSをコピーし、戦術機用に改造している。

なんでも俺専用の不知火が配備されるらしい。それにあのシュミレーターを見ていた感じ、既存の不知火が俺の動きについて来れてないそうだ。

そこでジャスティスのOSを使うことはできないのか？と言われてOSを戦術機用に再構成しているのだが…

シュミレーターが終わったのは1時間前です、初の戦闘です、

初めて見た生BETAで心が折れそうな心情です、

こんな状態の俺にこんなことさせるなんて夕呼さん、鬼や…。

「どっつどのぐらいでできそう？」

とかいって心の中で愚痴つてると美鬼の夕呼さんが現れた。

「徹夜すれば明日には…。」

「そんなに早くできるの!？」

そんなに驚く…?キラ・ヤマトなんて1分もかからないでストライクの未完成OSを完成させたんだよ?しかも戦闘中に。

「普通では…?」

そついうと夕呼さんが呆れたように

「あんたの世界の普通ってどんだけよ……。」

と言った。

それから約1時間どれだけすごい事が聞かされ、キラヤベエWWWとか思ったのはまた別の話。

- - - - -

「ところで夕呼さん」

「何？」

「俺の不知火っていつ配備されるんですか？」

「早くて明日ね。」

「ウツハ！ホントに早え。」

「アマゾンもビックリだね！」

「ホントに早いですね…。」

「ええ、大急ぎでって言うとしたから。あんたは人外レベルだしね  
（操縦技術が）」

「じ、人外ですか…ヒドイ……（キモさが）」

「？」

そこまで言つと整備士の1人が夕呼さん呼びに来た。

「じゃあサボらないでやんなさいよ。あと明日朝食とったら直ぐにここ来なさい。わかった？」

「……ウィっす」

そう言い残して夕呼さんは整備士の人とともにどこかへ行つた。

「さて、俺も頑張るか」

そう言つて俺は夕呼さんから借りたPCにOSをコピーさせて部屋に持ち帰つた。(因みにコピーにかかった時間は5時間)

ついでに言つとなんか変な若造が歩いてるとか思われたのか、人とすれ違うたびに奇異の目を向けられた。特に女性に。それで目が合うと顔を赤くして目をそらされる。俺の今の顔ってアスランだよな？何？オーラがキモイの？

まあ俺の階級を見て慌てて敬礼してきたけど。

それでも俺の心は綺麗にブレイクされた。

「明日から悪ふざけは自重しよう…」

部屋に着いて、作業再開。

最後に見た時計は午前3時を示していた。

次の日

10月23日 朝

- - - - -

「うーん……………（ソワソワ）」

朝、まりもはアスランの部屋の前にいた。

朝のPXで見かけることができず、夕呼に無茶をやらされまだ寝て

いると思い、起しに来たのだ。

まりもは意を決してアスランの部屋のドアノブに手をかけた。

ギィっとゆう音を立てながら扉は簡単に開いた。

音が出たことに少し驚きながらも、中に入ると布団に包まったアスランがいた。

起こした方がいいわよね！？そうよ！！

と自分に言い聞かせ、起こす為に体を揺さぶろうとした。

「アスランさ…ん…！？」

その時、見てしまった。

アスランの目に涙が浮かんてるのを

「渚あ…渚あ………！」

「-！-」

渚…？人の名前…？

一体…なんで泣いてるの…。

自問自答しても答えは出なかった。

「う、ん…？」



そこまで考えた時、アスランが起きた。

- - - - -

「うん…？」

朝、か？早いな…。

それにしてもいい夢見たぜ！

昨日色んな人に白い目で見られて心に傷を負った俺はイマジンワールド（現実逃避とも言つ）に逃げ込んで大好きなクラナドの夢を見たんだよね

シチュエーションは渚が他界するシーン。

あれは泣く、ガチで。

…ん？誰がいる？まさか変態！？おい、ガチホモレスリングやろうZE！って人？

「って、まりもさん！？どうしてここに！？」

な、なんだ〜よかった〜まりもさんで。掘られたらどうしようと思  
ったよ。

「…あ、いえ、PXにいないのでまだ寝てるのかと思って起こしに  
…」

「え…？」

そ〜っと時計を見る。

ウハッ！NE SU GO S I T A！！

「しまったあああああ！！！！！！」

殺される！！夕呼さんに殺される！！

すぐ来いって言ってたのに！！

俺はそばにかけてあった軍服に急いで袖を通した。

「まりもさんすみません！夕呼さんにお呼び出しくらってるんで急  
ぎます！」

「ちょ、ちょっと待ってください!」

ギョッ

俺が走って部屋を出ようとするとまりもさんが軍服の袖を引っ張ってきた。

仕草がいちいちカワイイなあ、おい!!

「な、なんですか?」

「あの、聞きたいことがあるんですが………渚さんとは誰なんですか?」

「え?」

今何て言った? 渚さん?

……まさか俺、寝言言ってた!? 嘘!? 恥ずかし!

「え、えつと…渚は俺の嫁です」

「ッ!」

な、何言っただ俺……！！此処で言うことじゃねえだろ！！  
ほら見る！まりもさんの顔が何言っただこいつ？みたいな顔にな  
ってんじゃない！！

「渚さんは…ソ連に？」

どうしょ…？

元の世界…なんて言えないしな。  
適当にはぐらかしておこ。

「もう…二度と会えないところにいます…。」 元の世界でという意味

あ、もうホントに見れないと思うと涙が出てきた。

「……」

チラッと時計を見る。

まずい！まじで時間がない！！

「すみません！俺はこれで……今の忘れてください！」

「あ……」

まりもさんはまだなにか言いたそうだったが、心の中でもう一度謝りＰＣを持ってハンガーに急いだ。

「（もう…二度と会えないとこにいます…。それってつまりアスラ  
ンさんのお嫁さんは既に…？泣きながら言うなんてよほどの事…も  
しかしてBETAに！？だとすればシュミレーターの時の激しい憎  
しみも合点がいく…。私はなんてことを聞いてしまったんだろう…  
最低ね）」

「…で？言い訳はできる？」

俺は今ハンガーにいる。

あの後結局遅れてしまい、土下座をしているところである。  
整備士の人が見ていないのは幸運だな。

「申し訳ありません！！」

「はぁ…もういいわよ。それでジャスティスのことなんだけど？」

「はい？なんか変でした？」

「変も何も…化け物ね」

「はぁ……？」

「光学兵器に謎の白銀<sup>はくぎん</sup>フレームによる圧倒的な機動力、<sup>ヴァリアブルフェイズシフト</sup>VP S装甲による実弾または打撃系攻撃の無効化、大気圏内飛行能力に普通の核機動じゃありえないほどのパワーの所有に無制限の活動時間、さらには宇宙対応の設定？こんなのオーバーテクノロジーもいいところよ。あと300年すればあたしたちもつくれるかもね」

うーん……。日本語でok。

とりあえず、すぐいつてことで

「……ということはジャスティスは？」

「当分使用禁止ね。こんなの戦場に出したらアメリカがうるさいし、  
なによりもっと集中的に調べないといけないようだしね」

「だよね」

「とりあえず、あんたはしばらく不知火に乗りなさい。OS、でき  
たんでしょ？」

「はい！ーっにー！」

俺がPCを突き出しながら言つと、感心したように夕呼さんは頷い  
た。

「へえーホントにやるとはね…驚きだわ」

「そうですか？ありがとうございます！それで結局不知火はきたん

ですか？」

「ええ、さすがに急がただけあって早く着いたわね。案内するわ」

-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-  
-

「これが俺の不知火か」

なんか嬉しい。かなり。

自分専用機ってなんか興奮しない？エースになった気分だよね。

「じゃああと頼んだわよ」



「はい。ありがとうございました」

夕呼さんに礼を言ってから俺は不知火にPCを接続してインストール作業を開始する。

……ぶっちゃけ暇だ。インストール作業はコンピュータが勝手にやってくれるし、俺はただボーっと見ているだけだ。  
うーん……だれかいらないかな？

「ん？あれは……整備士のひと？」

俺の不知火の隣で、カバーをかぶっているジャスティスを10人くらの整備士と思わしき人たちが熱心に整備……というより調査してる。

俺も行ってみよっかな。

不知火から降りて俺は整備士さんたちに話しかけた。

「あの、すみません」

「あ？なんだお前……って中佐あ！？し、失礼しました！」

話しかけた人はやっぱり階級を見て驚いて敬礼した。

「あ、いや普通でいいですよ？俺実際ガキですし」

「い、いえ……それは」

「うん……じゃあ中佐命令！こういう時だけでいいんで俺に普通に接してください。ね？」

「う、ああ……」

「ありがとうございます。それでどうですか？俺のジャスティス、なんかわかりました？」

「いや、まだなんも……って俺のお！？」

さつきからリアクション芸人だなあこの人。

いい人そうだけでも。いかにも親方！って感じだな。

そうだ、今日からこの人をリアクション芸人さん、略してリアさんと呼ぼう。

「はい、俺はアスラン・ザラ中佐です。よろしくお願いします」

「ありがとうございます！」

「へっ？」

俺が自己紹介するとリアさんが急に頭を下げてきた。

「な、なんぞ？」

「こんな素晴らしいものに触れてるのはお前のおかげだ！本当にありがとう！」

「「「ありがとう！」「」」

リアさんに続いて他のみんなも頭を下げてくる。

……なるへそ、みんな職人気質だからこういうのに触れられるのがうれしいのか。

「いえいえ……気が済むまで見てください」

「ああ！お前には礼を言ってもたんねえなあ！なんかして欲しい事ねえか？その不知火お前のだろ？」

して欲しい事？なんかあるかなあ？

専用機……ハッ！

「なら、お願いしたい事があるんですが……」

「おう！なんだ？」

「俺の不知火を私色に染め上げる！！」 某00の小物王

「は？」

「間違えた、俺の不知火をジャスティスのカラーと一緒にして欲しいんです」

「なんだ、そんなことすぐにやってやらあ！なあ、みんな！」

「……おー！！」「」

「ホントですか！？ありがとうございます！！」

いや、結構ダメもとで頼んだんだけどな。

こんなに快く引き受けてくれるなんて、とても……嬉しいです……。

「じゃあ、あとお願いできますか？」

「おう！まかせな！」

俺はインストール作業が終わるまで暇だし、カラーリングするなら邪魔になると思ったので、この場を後にすることにした。

## 第5話 スパロボは個人的に神だと思う（後書き）

今日も今日とて駄文祭り！！

サーセン、もっと努力します。

〈感謝〉

マサトさん、んんん（・・）さん、デステイニープランさん、七夜さん、感想ありがとうございます！！

〈元ネタ〉

俺の不知火を私色に染め上げる！！

ガンダム00よりアレハンドロ・コーナー

「ソレスタルビーイングの武力介入により世界は滅び、統一という再生が始まった。そして私は統一されたその世界を、私色に染め上げる！」のオマージユ

とても…嬉しいです…。

分かる人には分かる。

すごく…大きいです……。のオマージュ

最後に…こんなに伸びるとは思いませんでした!!

皆様ありがとうございます…。

## 第6話 ダークサイド（前書き）

ごめんなさい！

諸事情によりかなり投稿が遅れました！

しかも、短い、雑ともう最悪な出来です。  
とりあえず

「はっ！仕方ねえな！見てやんよ！」

って方、どうぞお願いします！！



## 第6話 ダークサイド

「御剣冥夜訓練兵です」

「あゝ、うん…」

俺は今、グランドにて武の部隊の人たちと自己紹介し合っているところだ。

……肝心の武はまりもさんに連れていかれたけど。

ハンガーを出て、ぶらぶらしていたら此处に着きその流れでこうなった、ということだ。

だけど、武は俺が中佐になったことをまだ知らなかったので普通に友達感覚で

「よう、アスラン！」

とまりもさんの前で言ってしまった。

まりもさんは

「白銀えええええ！！！！ザラ中佐に向かつてなあんて口のきき方をしているううう！！」

と般若……では生ぬるいような怒りの形相で武を引っ張って行った。

それから、あゝあ、またか……。のような空気が流れて普通にスル  
ーで自己紹介を始めたのだった。

うん、みんなすごいね！俺なんてさっきの顔見たら足がガクブルつたもん。

「まあ、気にしない方がいいですよ？いつもの事ですし」

え、つとこの眼鏡っ子は……榊 千鶴だっけか。

「はは、そうなんだ。所で敬語いらないよ」

人参いらないよ、み

「は？しかし……」

「お固い！あなた達そろいもそろってお固いですわよ！」

「いえ、ですが（わよ？）」

うんデジャヴ。

それならば、私の権力を使って君を屈服させようではないか！

「中佐命令！公然の場では仕方ないが、こういうときは敬語を外すこと！復唱！」

「で、ですが」

「復唱！」

「う、こ、公然の場では仕方ないが、こういうときは敬語を外すこと……」

「うん、ありがとう。みんなもそうしてね」

「はあ……？」

「いいじゃないのお。そおやって壁作ってやるよりはさあ？同じ国連軍なんだからさ？」 種死のいい人だったのに直ぐ死んだ可哀想な人

「それも、そう」

「慧!？」

「まあまあ」

「じゃ、じゃあザラさんって呼べばいいんですか?」

えつと……この猫みたいなちっこいおんにゃの子は……

確か珠瀬王姫だったのか?

てか思ったんだけどこの分隊って顔で決めてない?

なんでこんなに美少女がそろってんだろ?

そしてそれに囲まれる武……（イラッ

「あゝ?」

「ん? ああいいよなんでも。とりあえずフランクにいいっ!」

「は、はい！」

危ない危ない……俺の心が暗黒面ダークサイドに堕ちるところだったぜ。

「あれ？そっぴやあと一人いるんじゃないっけ？」

俺の記憶通りなら鎧衣……美琴？とか言う女の子がいたはずなんだけど。

「彼女は今入院中です」

「えっ！？そうなんだ」

ありゃりゃ……どんな子が見たかったのに

将来武が築くハーレムの住人をなあ！！！！

……いかにいかに！俺は暗黒面ダークサイドには堕ちんぞ！！

リア充氏ね（ボソッ

……くっ！此処にいたら俺は堕ちてしまう！

ここは一時撤退だ！

「じゃ、じゃあ俺はこれで……武とまりもさ……神宮寺教官にもよろしく言っというてね」

「はい！」

くそ！武の奴……。

はっ！べ、別に羨ましくなんてないんだからね！

……オエ！自分で言ってる気持ち悪くなってきた。

[illegible]



「もつと！……熱くなれよおおおおお！……！」 修造風に

まあ、そんなこと言っても1人では限界がある。

どんなに頑張っても、1人で攻略なんてできない。

中層、もしくはその手前で何回やっても撃墜される。

そもそも試験の時は完全に追い詰められていてトリップしていたからあんな芸当ができたんだ。

……友達欲しい。

「ふっ……」

でもそんなこと言っても楽しいものは楽しいわけで。

気がつけばもう8時を廻っていた。

「ちょっとやりすぎたな。体がかくがくだし。」

でも戦場の絆が好きだった俺にとってみればこのシュミレーターはもはや夢のようなゲームなわけで。

あるよね？ゲームしてて気が付いたらもう夜やん！……って時。



そんな感じなんだよね。

「どっせい」

俺はおっさんくさい事を言いながらシュミレーターを降りる。

すると近くにいた衛士Aさん（女）とBさん（女）がこっちに気がついて駆け寄ってきた。

「どうしたんですか？」

「どうしたもこうしたもありませんよ!!?」

俺が何の用か聞くと、衛士Aさんが期待と興奮の混じった声をあげた。

「?」

「あ、あの、私達お昼がちよつと過ぎたあたりにここで中佐がシュミレーターに入るのを見かけたんですが……」

「あ、そういえば一時ぐらいに始めましたね」

「ま、まさかその時間から今までずっとやってたんですか!？」

「うん」

Bさんの質問に答えると、Aさんが驚きと何やらよくわからない感情のこもった声をあげた。

なんかAさんは、キヤーツ! って言ってるしBさんは、うん……。  
って何か考え込んでる。

うん、把握できない。

「あの、俺もう行っていいですか? シャワー浴びたいんで」

「あ、すみません。呼びとめてしまって。お疲れさまでした」

「でしたー!! 今度いろんな話聞かせてくださいねー!」

「はい、お疲れ様(話し? なんぞ?)」

そう言って二人と別れて、俺はシャワーを浴びに行った。

・ ・ ・ ・ ・

「……………」

「どうしたの？」

「いや…………少し神宮寺軍曹に合ってくる」

「ふうん…………じゃあ、あたし部屋に行くね。おやすみ」

「ええ、おやすみ……………」

- -  
- -  
- -  
- -  
- -

「……………ということがありました」

「そう……………ありがとう。ごめんなさいね、こんなことさせちゃって」

「いえ、私も昨日着任したばかりの中佐とお話できてよかったです」

「そう……………それじゃあおやすみ」

「はい、失礼しました!」

「……………(1時から8時過ぎまで……………単純計算でも7時間以上の

シュミレーションを……常人ならとつくに倒れてるわ。こんな危険な事をするなんて……やっぱり渚さんの事がアスランさんを追い詰めてるのかしら……なんとか私が支えにならなくちゃ！！」

今日も勘違いは続く……。

## 第6話 ダークサイド（後書き）

ごめんなさい！

〈感謝〉

デステイニープランさん、十まつち十さん、七夜さん、マサトさん、XG-70b 淒之皇さん、佐山・御言さん。どうも感想、ご意見ありがとうございました！！

〈元ネタ〉

敬語いらないよ

ガンダム0083 STARDUST MEMORYより

コウ・ウラキ

ニンジン、いらないよ

いいじゃないのお。そおやって壁作ってやるよりはさあ？同じ国連軍なんだからさ？

ガンダムseeddestinyよりハイネ・ヴェステンフルス

長いので省略

もつと！……熱くなれよおおおおお！！！！

機動戦士松岡修造（笑）より松岡修造

そのまんま

ゝ懺悔、もとい言い訳の時間ゝ

さあ！此処まで遅れたわけを話そうじゃないか！盛大にな！！

……サーセン。

ステップ1、親類の死去により俺、鬱化

ステップ2、鬱から復活！………机の上にある大量の宿題という名の拷問

ステップ3、ぜえ、ぜえ……や、やっとオワタ！さあ！続きを……  
なんで！なんでだよ！！何で動かないんだよ！！パソコン！！！！  
……綺麗なデスクしてるだろ？動かないんだぜ？これ……。

といった具合です。ごめんなさい!!これから見てくれるという人にキスがしたいです!!



第7話 アスラン・ザラの憂鬱 ～SOS団創るわよー!～（前書き）

今回は話が二転三転してて分かりにくいです。

すいません。

第7話 アスラン・ザラの憂鬱 ～SOS団創るわよ～

10月24日

朝 アスランの部屋

「ふぁゝあ。……朝、か」

上半身を起こして少しだけ伸びをする。

何とも言えない快感がよい感じに目を醒ます。

昨日は寝坊してまりもさんに恥ずかしい姿を見られたし、夕呼さんには怒られるしいいことがなかったから早めに起きたのさ！

「どっこいしょ……っ」と

俺は頭を掻きながら布団から降りる。

傍に<sup>たた</sup>置いておいた、軍服に手を伸ばしてそでを通す。

うーん……たまには早起きもいいなあ。気持ちいいね。

「よし、今日も一日頑張るか！」

俺はそう意気込んでPXに向かった。

§PX§

「すみません、お隣よろしいですか？」

「んあ？……まりもさ……神宮寺軍曹？」

PXで合成のあんまりおいしくない食事をちまちまと食べていたら後ろからまりもさんに声をかけられた。

よっしゃあー！朝からまりもさんに会えるなんて今日はツイてるぜ！

「どうぞどうぞ。1人で食べてもつまらないですしね」

「あ、ありがとうございます……」

そついうとまりもさんは静かに俺の隣に腰かけた。

ああ……僕は幸せ者です。

まりもさんを横目で見つつ、食事を再開する。

なんだかまりもさんが来たら飯がうまくなってきたぞー！

「……………あの、ザラ中佐」

「はい？」

食事を再開してから少したってまりもさんが話しかけてきた。

「昨日の事です……かなり長い時間シュミレーターをやったそうですね？」

「あ、はい……あの、いけなかったでしょうか？」

「い、いえ！そういうわけでは……」

よかった。

何の話かと思つてたら昨日の事を何やら怖い顔で聞いてくるからてつきり怒ってるんだと思つたよ。

「ただ……」

「ただ？」

そついうとまりもさんは少し恥ずかしそつに頬を赤らめながら言つた。

「あまり……無理はしないでください！その……色々思いつめてい

ることは分かってますが、どうか無理しすぎないでください……私の勝手な感情ですが、ザラ中佐が苦しんでいるところを見るのは……とても辛いです……」

「え？あ、え？」

え……と？どういうことなの？状況把握不可能なんですけど。

……つまりゲームのやり過ぎには注意！ということなんですね？

なんというお母さん。

こんなお母さんだったら友達に自慢しまくるよね？

「わ、分かりました……心配掛けてすいませんでした」

「えー？あ、いやその……私こそ出過ぎたことを……」

「いえいえ！神宮寺軍曹の心遣いに感激しました！ありがとうございます！（キラッ） 爽やかスマイル」

「あ、その……そう言ってもらえると、嬉しいです……／／／」

やっぱりかわいい……。

まりもさんはこの世界の天使だった件。

綺麗でかわいくて、優しいなんてどういうこと？反則だよ。

「ははは。それじゃあさっさと食べますか！」

「そうですね」

そう言って俺たちは食べ終わり、まりもさんは訓練へ俺はハンガーへと行った。

「ん？あ、リアさんだ」

ハンガーに着くとリアさんが目に入った。

昨日の不知火の塗装やジャスティスのことについても色々聞きたかったので声をかけることにした。

「すいませ〜ん！」

「ん？おお、あんたか！ちょうどいいところに来たな！」

俺が呼びかけると直ぐにこっちに気付いて駆け寄ってきてくれた。

どうしたんだろ？なんか嬉しそうな顔してるけど。

「聞け！あんたの不知火、塗装完了したぜ！」

「なんと！もうですか？」

「おうー！」



早い！仕事が早い！！

それにたぶん昨日から置きっぱなしのPCがOSをインストールし終わっててると思う。

つまり……今日から本当に俺の専用機が使えるようになるってことさ！！

HAHAHAHAHAHAHAHA！！笑いが止まらん！！

「おい！大丈夫か？」

「あ、すいません。大丈夫です！」

「そうか？ならいいんだが」

「あ、あの！早く見に行きましょう！！」

「お、おう……付いてきな」

リアさんは何だか俺の気迫に押されてた様だったが直ぐに踵を返し案内してくれた。

w k t k、w k t k！

「これが、俺の……不知火」

見上げるとそこには見たこともない不知火があった。

淡い赤色の装甲。

猛々しい機体。

そして……

「ははは！どうだ？すげえだろ？」

「…………お…………お」

「？」

右肩に力強く白で書かれた‘正義’の文字。

「うおおおおおおおおお！！！！！！」

「うお！？」

「ありがとうございます！！ありがとうございます！！！！！！！！」

「ちょ、おま、落ちつけ！！手え離せ！！」

俺は嬉しさのあまり魂の咆哮をして、リアさんの手を取って激しい上下運動をさせた。

リアさんは俺の手を振り払ったが俺の興奮は収まらなかった。

「神よ！あなたはまた！私に！幸せを送ってくれるんですね！！」

「おーい！戻ってこーい！」

それから十分後……。

「本当にありがとうございました!」

「はははは!そこまで気に入ってもらえると頑張ったかいがあったもんだ!なあ、みんな!」

「」「」「はい!」「」「」

「じゃあ早速シュミレーションしてきます!」

「おう!頑張んな!」

俺はリアさんとその仲間たちに感謝の気持ちを述べ、シュミレータ  
ーへ急いだ。

思ったけどOSができたことを夕呼さんに言わなきゃいけないと  
思ったので執務室に急いだ。

§執務室§

「夕呼さ〜ん！俺だ〜！結婚してくれ〜！！」

「ブツ〜！！」 コーヒーを吹いた

俺は執務室に入ると同時にふざけてしまった。

夕呼さんはこういうのが嫌いを知っていたのに！やっちゃった！

「…………この〜」

「ひでぶ〜」

はい！予想通りいいビンタいただきました！

本当にありがと〜ございます！

「へーそれでこれからシュミレーターをしに行くわけね」

「はい……あの、謝るんで降りてもらえませんか？」

俺は今夕呼さんと話をしている。

俺が椅子、その上に夕呼さんという構造だが。

「だめよ。あんたがふざけないように少しは教育しないとね」

「教育！」

夕呼さんが教育と言うとエッチな事を連想してしまうのは俺だけじ

やないはずだ！

「教育……はあはあ」

「……逆効果ね」

そういうと夕呼さんは俺の上から降りてソファーに座った。

くそ！勿体ないことした！！

「でも悪いけどあたしはシュミレーターに付き添えないわ」

「え？何故？」

「忙しいのよ……色々とね」

あゝなるほど、確か夕呼さんって超重大なことしてるんだっけ？

何なのかは知らないけど。

それじゃあ仕方ないな。

「わかりました。じゃあ1人でやってきます！」

「待ちなさい」

「はい？」

シュミレーターをやるために執務室を出ようとしたら夕呼さんに呼びとめられてしまった。

「一応その不知火の記録もあとで見たいからあたしの秘書をつけるわ」

「秘書？」

「ええ。今呼ぶから少し待ってなさい」

「はい」

数分後……



「失礼します」

「来たわね」

「んあ？」

俺は暇だったので少し昼寝　と言うには早いかもしれないが  
をしていたが扉の開く音で目が覚めた。

……ウハ！金髪テラ美人www

「こいつが頼みたい男よ」

「はあ、わかりました。……イリーナ・ピアティフ中尉です。よろ  
しく願いします、ザラ中佐」

「あ、アスラン・ザラ中佐です。こちらこそよろしく願いします。  
あとアスランでいいですよ？」

「は？いやですが……」

「夕呼さ〜ん！なんでみんなこんなにお固いんですか？」

「お固いのは分かるけどまあ軍規だしねえ……ま、あたしは気にしないわよ？」

「だってお」

「ですが……」

「よし！分かりました。じゃあこいついときは階級無しで行きましょう。まりもさんもそうしてますし」

「神宮寺軍曹も？」

「はい！」

「……わかりました。ではアスランさん、でよろしいですか？」

「はい、ピアティフさん」

「イリーナ、でいいですよ？私も名前で呼んでいるんですし」

「あ、はい。イリーナさん」

よし！話し相手ゲット！

マジでここでの話し相手が少ないからこういう人ができるのは嬉しいなあ。

「では行きましょうか、アスランさん」

「あ、はい。じゃあ夕呼さん、また！」

「はいはい、精々頑張んなさい」

俺は夕呼さんに敬礼してイリーナさんに付いて行った。

§シミュレーター§

「ふふふふ……行くぞ、やってやる、やってやるよ!」

俺が今乗っているのはジャスティスのOSを載せた淡い赤色の不知火だ。

……不知火だけじゃ味気ないな。なんか他に名前つけよっか。

何がいいだろ? うゝん……。

……不知火カスタムでいいや。考えるのめんどくさいし。

「それではザラ中佐、準備はよろしいですか?」

「はい」

「それでは始めてください」

「アスラン・ザラ、不知火カスタム、出るぞ!」

俺は始まってすぐにハイヴに突入した。

もう見なれた面々が盛大に歓迎してくれる。

ちなみに俺の武装は突撃前衛ストーム・バンガードと言っらしい。

「喰らえ！」

撃ちすぎないようにできるだけ目の前のBETAだけを撃って進む。

………みんな、聞いてくれ。

不知火力スタムテラつよすwww。

なあにこれ。 某カードゲームの王様の光の方風に

普通の不知火の反応速度が1だとすると、不知火力スタムは10位だよ？

異常です。 もう機械を扱ってるとかそんな感覚はない。

ただ手足を動かすような感覚で機体が動く。

いや、それよりも動く。

まさかOS一つでここまで変わるなんてびっくりしました。

§イリーナ・ピアティフ§

「アスラン・ザラ、不知火カスタム、出るぞ!!」

アスランさんがそういつてシュミレーターを開始した。

初めてあの不知火を見たときは驚いた。

だけどシュミレーターの内容はその時の驚愕を遥かに凌駕していた。

「喰らえ!」

決して撃ちすぎず。

撃たなさすぎず。

その状況判断も確かにすごかった。

「この!」

それでも、この動きのすごさの前ではかすんでしまった。

踊っているかのように滑らかで華麗な機動。

相手のBETAが可哀想になってくるほどに攻撃が当たらない。

不知火の装甲を着た人間が動いているんじゃないかと錯覚してしまうほどの動き。

それを苦しい顔もせずに軽々とこなすアスランさん。

この人がいれば……！

そう思わずにはいらなかった。

§イリーナ・ピアティフouts§

「そら！」

弾がもつたいないので武器を長刀に切り替え、BETAを切り裂きながら奥へと進む。

やっぱり相手が血が出る奴で実体剣だとだんだん切れなくなってくるのがめんどくさいな。

愚痴りながらも進む。

『前方より要撃級多数接近』

「了解！」

うーん。やっぱり一人よりいいね。

頑張れる！

前方から来た敵を邪魔な分だけ切り裂いて進む。

進んでいる最中、遂に長刀の一本目が折れた。

すかさず二本目を手に取り切り裂く。

ちなみに、今半分以上進んで被弾数0です。

だけでもう武装がないお。

「しょうがない……まっがーれ」

俺はそう言って自爆ボタンを押した。



第7話 アスラン・ザラの憂鬱 〽 SOS 団創るわよー! 〽 (後書き)

昨日友達に

「長刀って片手で使えんの？」

って聞かれて「え？」ってなりました。

分かる人助けて〜！

注 作者は最初に書いてあった通り知識曖昧です。

〽 感謝 〽

佐山・御言様、デステイニープラン様、ユニコーンデストロイ様、  
まくる様、マサト様、七夜様、とらふぐ様 感想、メッセージあり  
がとうございます！

〽 元ネタ 〽

なかったと思います！

次回も見れる人だけ見てね！

第8話 緊張すると自分でも何言ってるかわかんなくなる時ってあるよね？（前

遅れてサーセン。

ひどい駄文です。ダメな人はまわれ右してください。

123,028アクセス 24,307人 突破！ありがとうございます！  
います！

第8話 緊張すると自分でも何言ってるかわかんなくなる時ってあるよね？

「中々いい感じだと思っただけだな」

俺はそう言っただけでシュミレーターから降りる。

今のシュミレーションの結果は最深部一歩手前。

……凄くない？ 1人でだよ？

「アスランさん!!」

するとイリーナさんがこちらに駆け寄ってきた。

「どうしました？」

「どうしました？ じゃありませんよ!! 単騎で、単騎ですよ!!? 単騎でハイヴを此処まで進むなんて……歴史的快挙ですよ! ? これは!!」

「おおふ……」

おk少しもちつこうか。

おかしいですよ、イリーナさん！！（テンションが） 某年上キラ  
ーのニュータイプ

「じゃあ、もう一回やりましょうか？」

「はい！」

そういつて俺はシュミレーターに再度搭乗し、再開。

結局その後も最深部にあと一步というところで何度も失敗。

もっとやりたかったけど朝、まりもさんに注意されたのでやりすぎ  
ないようにお昼で止めた。

「イリーナさん、今日はありがとうございました」

「いえ、こちらも素晴らしいものが見られて大変有意義な時間でした」

「ははははは……じゃあまた今度お願いしてもいいですか？」

「もちろんです！　こっちからもお願いしようと思っていました！」

「じゃあ、またお願いしますね」

「はい！」

そういつて俺とイリーナさんは別れた。

10月25日

P X 朝

「うーん、美味くない」　まずいと言わないこれ、大事

何度食べても慣れるもんじゃないな。

ああ、元の世界のご飯が恋しい……。

「ザラ中佐、ご一緒してもよろしいですか？」

「あ、神宮寺軍曹。どうぞどうぞ」

そんなこと思っていたら昨日に引き続き、まりもさんに声をかけられた。

「どうですか？　武たちは？」

「いいですよ。飲み込みも早いですし……ですが白銀はなんだか兵役を受けていたような気がするんです」

まあ、受けてましたもん。前の世界で。

……とは言えないので知らないそぶりをしなきゃね。

「……と、言いますと?」

「教えていないはずの生身と戦術機の射撃のタイミングの違いや、自己鍛錬では済まないような体力などあげれば数え切れません」

「なるほど……」

テラヤバスwww。

フツーに武の努力にびっくりだね。

「何か知ってますか?」

「いえ……すみません」

「い、いえ! そんな謝っていただくことでは!」

「まあ、武も武なりに考えている事があると思いますんで」

「そう、ですね……」



まりもさんとそんな話をしながら食べていたら、あっという間に時間が来た。

「神宮寺軍曹、すいません。俺、これから夕呼さ……副司令の所に行かなきゃいけないんで失礼します」

そう、俺は今日も夕呼さんにお呼びだしを喰らったのだ。

多分、昨日の事に着いてだと思っただけ。

「あ、はい。」

「じゃあ、訓練頑張ってくださいね。神宮寺『教官』」

「ふふふ……分かりました」

そう言っつて、俺はPXを後にして執務室へ向かった。

§執務室§

「夕呼さ〜ん！ 俺だ〜！ 結婚し……ぶげら〜！」

「ふ、読んでいたわ」

あ、ありのままに今起こったことを話すぜ！

『いつものように夕呼さんに求婚しようとしたら、いつの間にかビ  
ンタされていた』

な…何を言っているのかわからねーと思うが、俺も何をされたのか  
わからなかった…。

頭がどうにかなりそうだった…トラップだとか監視してたとか、そ  
んなチャチなもんじゃあ断じてねえ。

もっと恐ろしい女の感ってやつの片鱗を味わったぜ…。

……まあ、要約すると夕呼さんが俺がふざけるのを読んで待ち伏せしてたって話。

「ひ、ひどい！ 親父にもぶたれたことないのに！！」 某初代二ユータイプ

「……どんだけ親バカなのよ」

「ちょｗｗマジレス勘弁ｗｗｗ」

夕呼さんはそういうとソファーに座った。

そしてコーヒーを片手に持ちながらこう言った。

「昨日のシュミレーションの結果、見せてもらったわ」

「……どうでした？」

俺がそう聞くと、夕呼さんは一呼吸置いて

「あんたホントに人間？」

と、人の心を抉る一言を言ってきた。

「人間ですよ！」

「まあ、それはどうでもいいわ」

「どうでもいいんかい!!」

「あ？ タメ口？」

「サー！ すいませんでした!!」

もうやだこの人。

なんなの、一体。

「ま、冗談はさておき……今日呼んだ理由だけ……次は対人戦のデータがほしいの」

「はあ……そりゃなんでまた」

「念のためよ。一応、データを集めなきゃなんないの」

「おk、把握」

あ、でも対人戦って俺生まれて初めてだわ。

「それで、一体誰が相手をしてくれるんですか？」

「これからそいつらにあんたを紹介しに行くから付いてきなさい」

「はい」

そう言って部屋を出て行った夕呼さんの後に着いて俺は執務室を出た。

§シミュレータールーム§

「あの〜夕呼さん？」

「なに？」

「誰もいないんですが……」

俺は夕呼さんに連れられシミュレータールームに来ていた。

先に着替えておけと言われたので強化装備を装着してきたんだけど……。

誰もいない。

あるえー？

「だって今貸し切りにしてるもの」

「へ。でも、その相手は一体どこにいますか？」

「もうすぐ来るわ」

「ちなみに……男ですか？女ですか？」

「女よ」

「オーマイゴット！！」

「なんてこったい！！」

「……みんな聞いてくれ。もう俺の性格は分かっていると思う。こんな奴なんだ、俺は。」

「そんな俺が……女性衛士の強化装備を直視できるわけねえだろお！！  
某御大将」

「今まではなんとか見ないようにしてシュミレーターに駆けこむ事が出来たけど今日はまずい！！」

「紹介するってさっき夕呼さんが言った。」

「つまり俺は強化装備を着たその女性衛士と話をしなければならぬという事だ！！」

「……………（こいつ、何難しい顔してるのかしら……。いつもそうだけど、シュミレーターをやるときはこういう顔になるわね。ずっとこういう顔してれば格好はいいんだけどね……）」

やばいやばいやばい！

落ちつけ俺！ 深呼吸だ！

スーッ、ハーツ、スーッ、スーッ、スーッ、スーッ、

……ゲホガハゴホ！！？

「お、来たわね」

「来ちゃいましたか……」

夕呼さんが見ている方向を見ると、10人ほどの女性衛士がいた。

しかし、強化装備を着ていたのは一人だけだった。

その2人と1人軍服を着た女性衛士はこちらに気がつくや直ぐにこっちに来た。



「お待たせしました！ 副司令！」

「いいわよ」

2人と1人軍服を着た女性衛士は俺と夕呼さんの前に来ると敬礼をし、挨拶をした。

「アスラン、こいつらはあかし専用の特殊部隊、A - 01部隊よ。伊隅」

そういつと強化装備を着た大人っぽい女性衛士が前に出た。

「はい。私は伊隅みちる大尉であります。A - 01部隊の部隊長を務めさせていただきます」

「あ、自分はアスラン・ザラ中佐です」

「……………は？」

「アスラン・ザラ中佐です」



「いいですよ。それよりそっちの人は？」

「……私は速瀬水月中尉です。B小隊小隊長を務めています」

「わ、私は涼宮遙中尉です！ 戦域管制を担当しています！」

「……そういうわけよ。これから伊隅と速瀬対アスランでシュミレーターをしてもらっわ。伊隅と速瀬のオペは涼宮、アスランはあたしが担当するわ」

「……え？ 2対1？」

「なんていじめ？ これ。」

「てかさそろそ俺の股間が爆発するよ？」

「あゝ？ その若さで中佐ってことはかなり強いんですね？」

「え？」

「み、水月！？」

「速瀬!!」

何々? どうしたの?

なんか2828して速瀬さんが言ってきたけど。

え? もしかして喧嘩売られてる? なして?

「まあ、速瀬の言いたいこともわかるわ。こんなガキが中佐やってんのが信じられないんでしょ?」

「まあ、そうなっちゃいますね」

「速瀬!!」

夕呼さんの台詞に同意する速瀬さん。

いやいや君たち、そういうことは本人のいないところで話そうか。

「すみません。ザラ中佐。速瀬にはきちんとっておきますので」

「いや、いいですよ。それにホントに俺はガキですし。伊隅大尉も

俺に敬語使わなくていいですよ?。」

「は!?! いやしかし……」

「ほおら。中佐だってそう言っただけですからいいじゃないですか」

「速瀬……お前というやつは……」

「まあまあ……落ち着いて」

「あ、あの! 水月に悪気はないんです!」

「いやいや……涼宮さんや。」

速瀬さんに悪気以外の何があるんですか?

そこらへん小一時間話し合いたいんですけど。

……なんて言っただけがややこしくなって、俺の股間のテポドンが爆発したらシャレにならないから言わないでおく。

そんなこんなあって、やっと模擬戦を始めるところま

でこぎつけた。

……いやね？ もう疲れたよ。

『それじゃあ始めるわよ？』

「いいですよ」

『まあ、精々頑張んなさい』

俺はこの時、初めての戦術機による対人戦だという事で緊張していた。

だから、

「……夕呼さん。一瞬たりとも目を離さないでください。どれだけこの世界の衛士の質が低いか見せてあげます」

『！』

自然にお口が動いちゃうんだ

某ファーストフード店の道化師

§香月夕呼§

『……夕呼さん。一瞬たりとも目を離さないでください。どれだけこの世界の衛士の質が低いか見せてあげます』

「  
！」  
」

さっきまであたしや速瀬にどんな事を言われてもアスランは笑っていた。

だけど今はどう？ 睨むだけで人を殺せそうな眼をして。重く静かな声で淡々と話す。

アスランの機体、ジャステイスはあたしたちの世界では辿りつけないような性能を持っていた。

あんな技術があるという事は必然的にアスランの世界の、戦争の質、も高いはず。

そんな世界で二度の大戦を生き残った。

社は言ってた。あの人、アスランの周りの人はほとんどがもついな

いと。

つまり、死。

「失ったものが違う……ってことかしらね……」

あたしはそう呟いて、模擬戦が始まるのを見ていた。

§香月夕呼out§

『状況開始!』

涼宮さんの声が上がると同時に速瀬さんの不知火が走ってくる。

そしてその後ろから伊隅さんが弾を放つ。

これ、なんて無理ゲー？

「（あいつの不知火……確か不知火力スタムって言ったわね。あんなの私が落してやる!）」



「なぐんて思ってたろうな」速瀬さんは

俺は一気に水平噴射をして間合いを詰める。

「な！？ 馬鹿なの！！？」

速瀬さんがそう言う。

まあ馬鹿だよなあ。何にも装備せずに突っ込むなんて。

「もらった！！」

速瀬さんはそう言うと言った手に持った長刀を振り下ろしてくる。

これで決めるつもりなのか大振りだ。

……… と思うたよ！ 速瀬さんの性格ならさあ！！

「！？ 速瀬！ 迂闊に大振りをするな！ ザラ中佐は何か狙って」

伊隅さんが何か言おうとしてたけどもう遅い。

「当たらんよ!!」

「え!!?」

速瀬さんの長刀が振り下ろされる瞬間、俺はバク宙でその長刀を避けた。

そして着地の瞬間に水平噴射しながら背中の中長刀を手取る。

「喰らえ!!」

「きゃあ!!」

そのまま長刀で速瀬さんの不知火の両脚を斬る。

そしてすぐさま後ろを振り向いて長刀を振り下ろし

「終わりだ!!」

速瀬さんの不知火の両手を斬り落とした。

ダルマの完成だ！！

『え、あ、え？ は、速瀬機。致命的損傷……大破』

涼宮さんのテンパってる声が聞こえる。

まあ一瞬だったしね。

伊隅さんの援護も間に合わないほどだったし。

「は、速瀬え！ ……この！」

「おっと！」

伊隅さんが弾を放ちながら横に移動する。

俺はそれを後ろに跳びながら避け、長刀をしまい銃を手にとって弾を放つ。

「はあああああああ！！！」

すると伊隅さんは片手に長刀、もう片方には銃を持ち弾幕を張りながらこっちに向かってきた。

……なら俺も！

「（な！？　こちらが弾幕を張っているのに突っ込んでくるだど！  
！？）」

俺は伊隅さんの放つ弾幕の中に突っ込んでいく。

傍から見れば自殺志願者だなあ。俺って。

まあシュミレーターだから死ないけど。

「狙い撃つ！」　某イケメンスナイパー

「！？」

俺は弾を伊隅さんではなくその足元の地面に向けて放つ。

すると砂煙が起き、一瞬だけ伊隅さんの視界を奪う。

「く！」

伊隅さんは俺を近づけまいと弾幕を張るのをやめない。

馬鹿め！ 素直に下がればいいものを！！

「喰らえい！ ナアアイフ！！」

そこに俺は短刀を投げる。

そしてすぐさま跳躍し、伊隅さんの後ろに回り込む。

「く、この！！」

直ぐに短刀が弾かれる音がする。

だけどその音でどこにいるかわかっちゃうんだ

「俺が… 不知火だ！！」 某ガンダムフェチの少年

「な、に！！」

俺の不知火と伊隅さんの不知火が交差する。

そして砂煙が晴れる。

『……………伊隅機。致命的損傷、大破……………』

そこにはコックピットしかない不知火が転がっていた。

「yes I can」

結局模擬戦は俺の勝利で終わった。

第8話 緊張すると自分でも何言ってるかわかんなくなる時ってあるよね？（後

もう、ね？もう一回ゲームを買いなおそうか迷っている今日この頃。

てかこの時期にA・01が横浜基地にいたかすらも謎。いいよね。  
ご都合主義で。

あと死ぬはずの名無しさん達はどうしよう？いない事にしていいかな？

ダメならだれかアイディアくださいな。

それともう一つ速瀬さんを落とした時の動きはガンダムSEEDのフリーダムの動きの真似です。

〈感謝〉

佐山・御言様、ほんちよー様、三平様、この世全ての悪様、デステニー・プラン様、マサト様、妖様 感想、質問への返事、ありがとうございます！！

〈元ネタ〉

おかしいですよ、イリーナさん！！（テンションが）

機動戦士Vガンダムより ウツソ・エヴィン

おかしいですよ、カテジナさん！！

あ、ありのままに（ry

ジョジョの奇妙な冒険第三部より ポルナレフ

あ、ありのままに（ry

女性衛士の強化装備を直視できるわけねえだろお！！

ガンダムより ギム・ギンガナム

忘れたお

自然にお口が動いちゃうんだ

機道化師ドナルド！より ドナルド・マクドナルド



自然に体が動いちゃうんだ

狙い撃つ！

機動戦士ガンダム00より ロックオン・ストラトス

俺が…不知火だ！！

同じく00より 刹那・F・セイエイ

俺が…ガンダムだ！！

## 第9話 悪友（前書き）

遅くなったが大丈夫か？ 大丈夫だ、問題ない。

## 第9話 悪友

「うん、楽しかった!」

俺はシュミレ・ターから降り、背伸びをしながら言った。  
忘れてたよ。アスランの本領はMS戦、つまり対人戦だということ  
を。

「……………」

「……………お見事です。中佐。まさかここまでとは……………」

「いやゝ、機体がよかったんですよ。伊隅大尉もお見事ですよ」

「いえ、あの機体をあそこまで動かせるなんて中佐の技量有ってこそです」

俺が降りると直ぐに伊隅さんと速瀬さんが降りてきた。  
伊隅さんは少しシヨックを受けた顔をしていたがなんとか話せるようだ。

だけど速瀬さんは俯いて唇を噛み締めてる。  
するとその後ろから夕呼さんと涼宮さんがやってきた。

「ちゅ、中佐、お見事でした……（ほら、水月もちゃんとして！」

「いえいえ」

「……たは……のよ……！」

「？」

「あんたは……のよ！」

「速瀬さん？」

「……あんたは何で私に何も言わないのよ！？ 笑えばいいじゃない！ あんな大口たたいたいて、直ぐ落とされて！ 口だけの力のない奴だつて！」

「な、は、速瀬！！？」

「み、水月!？」

え〜〜〜〜。

なんかいきなり速瀬さんがキレた。

何故にいきなり怒ってんの？ 俺なんかした？

「あの、何について笑えばいいんですか？」

「  
！」

俺がそう聞くと、速瀬さんは走って逃げだした。

なぜ逃げたし

「あ、み、水月!! すいません私追いかけます!!」

「あ、こら待て! 速瀬! 涼宮!」

「放っておきなさい伊隅。速瀬の事は涼宮に任せときなさい」

逃げ出した速瀬さんを追う涼宮さん。

そしてその二人を追おとした伊隅さんを夕呼さんが止めた。

「しかし……」

「いいから。あんたは他の隊員たちと反省会でもしてなさい」

「……了解しました」

そついうと伊隅さんは俺と夕呼さんに敬礼して他の一緒に来ていた人たちとどこかに行ってしまった。

……え？ なにこれ俺のせい？

「まったく……で、どうだった？」

「なにがですか？」

「伊隅と速瀬よ。あんたから見てもあの二人はどうだったの？」

伊隅さんと速瀬さんか。俺から見たら二人とも凄い強いよね。  
俺はホラ、ズルだしね。

「強かったですよ?」

「……本当に言ってるの?」

俺がそう答えると夕呼さんは少し厳しい顔つきになってそう言った。  
え、まさか夕呼さんまでご機嫌斜めですか? ということなの…。

「あの、夕呼さん! 俺腹減ったんでシャワー浴びて昼飯食ってきます! チャオ!」

「あ、待ちなさい!」

この空気は本当に無理。ということであは逃げる事にするぜ!

ごめんよ、夕呼さん。

「……………(あれだけ一方的に瞬殺しといて『強かったですよ?』か……皮肉を込めているのか、それとも呆れられているのか。どっちにしても始めるときにあんな事を言っておいてそのあとにこの言葉ってことは……アスランがこの世界を救う事を諦めるかも知れないわね。それだけは絶対に阻止してみせるわ!)」

§シミュレータールーム 午後§

「あゝ……どうしよう………」

俺は今、ヒジョ〜〜〜に困ってる。

え？ 何故かって？ 速瀬さんがいるんだもの！  
どうしたのあの人！？ 人殺すような眼をしてるよ！！  
こっとなったら……

「こちらスネーク。これより潜入する」

目標は速瀬さんの向こう側にあるシミュレーターだZ E  
ほく前進、ほく前進と……。

「あ！ いた！」



「ですよ〜」

そりゃ見つかりますわ。

「中佐！ もう一回私と勝負して！」

「だが断る」

「な、なんでよ！」

「だって午前やったじゃないですか〜。速瀬さんは俺にキレてどこか行っちゃいますし」

「あ、あれは……」

いや〜。だが断るは完全にノリで言ってしまったよ。  
俺的には全然オッケーなんだけど。

「……わかりました。やりましょう」

「え、いいの？」

「ふむ、見せてもらおうか国連軍の性能とやらを」 某仮面大佐

「今度こそ勝つてやるわ!!」

今の俺の言葉に「今更!？」と突っ込まないとわ……。

?(馬鹿という意味)なのか純粹に燃えているのか。恐らく後者。

そついうわけで模擬戦開始。

「甘い!」

「きゃあ!？」

一勝。

「横がから空きだ!」

「いつの間に……ああ!!」

二勝。

「ガトチュエロスタイム!!」

「な!!」

三勝。

「頭がパン!」

「た、短刀で!!?」

四勝。

「g o ! a c t i v e !」

「ランランルー!!」

あっという間に五勝した。

「はあ……はあ……こんなにやって一撃も入れられないなんて……」

「……………」

なんか最後速瀬さんも言ってた気がするけど大丈夫か？ 大丈夫だ、問題ない。（自己解決）

「私じゃ……勝てないの？」

「！」

速瀬さんが弱気に！？ いかん、これはマズイ！  
こうなったら最高に熱い男になりきって速瀬さんを元気づけなくては……

「あきらめんなよお！」

「え……………」

「諦めんなよ、お前！！　どうしてそこでやめるんだ！？　そこで！  
！　もう少し頑張ってみてみるよ！　ダメダメダメ諦めたら。  
周りのこと思えよ！　応援してる人たちのこと思ってみろって！！  
あともうちよつとのところなんだから。　俺だってこの疲れた体  
のところ、しじみがトウルル……　ゲフンゲフン、もっと強くなろう  
って頑張ってたんだよ！　ずっとやってみろ！　必ず目標を達成できる  
！　だからこそNever Give Up！！」

松岡修造！

俺はこの世界……いや向こうの世界か。　とにかく彼ほど熱い人間を  
俺は見た事がない！！

「そう、よ。　私は負けない……」

お、いい感じ！　あとひと押しか！

「がんばれがんばれできる絶対できるがんばれもつとやれる  
って！！　やれる気持ちの問題だがんばれがんばれそこだ！　そこだ  
！　諦めんな絶対にがんばれ積極的にポジティブにがんばれがんば  
れ！！　北京……　ゲフンゲフン、俺だって頑張ってるんだから！」

「私は……」

「俺は……」

「Never Give Up!!」「シャキーン!

決まった……。この上なく決まった。  
というかよくこれだけ覚えてたな。

「もう一回やるわよ!」

「合点承知の助!」

俺たちはシュミレーターに駆けこんだ。

「行くわよ!!」

「来い!!」

この日、俺は初めて対人戦で被弾を経験した。

## 第9話 悪友（後書き）

（感謝）

佐山・御言様、デステイニープラン様、この世全ての悪様、マサト様、とらふぐ様、七夜様、アルベルト様。感想、ご意見、リクエストありがとうございます！

これからもよろしかったらお暇なときにでも目を通してやってください。

（元ネタ）

需要があるか分からないんで今回はカット。  
また書けという人がいたら書きます。

（一言）

おかしなところあったら報告お願いします。

これから2週間前後、テスト期間なんでさらに投稿が遅れます。サ  
ーセン。

中国のせいで俺の寿命がストレスでマッハ何だが。（美鈴の事じゃないよ？）

第10話 野生のアスランが現れた！（前書き）

つかれたお・・・

これで1ミリは文章力が上がっていればいいな～と思っザヴァーン  
軍曹なりました。



## 第10話 野生のアスランが現れた！

10月26日 朝

アスランの部屋

「あゝ、ねむ……」

俺はいつものように少し伸びをしながらそう呟いた。

いやゝ、それにしても昨日はビビったよ。速瀬さんの気迫に。

被弾を恐れずに攻撃してくるなんてねゝ。そのせいで驚いて俺が被弾しちゃうし。

確かに実戦じゃしちやいけない事かもしれないけどそのぐらいの気迫はあってもいいよね？

そうして自己解決して俺はPXへと向かった。

§ P X §

「あの、ザラ中佐……折り入ってご相談があるのですが」

「はい？　なんですか？」

いつものようにPXでまりもさんと朝食を取っていたらまりもさんがそう切り出してきた。

「私に戦術機の戦闘指南をしていただけないでしょうか」

「……何でまた？」

「昨日の事を聞きました。伊隅大尉と速瀬中尉の二人をたった一人で倒したと……。あの二人は国連でもトップクラスの衛士なんです。その二人を倒したザラ中佐は間違いなく国連最強クラスの衛士です。」

……私もまだ強くなりたいんです！　そしてBETAを倒したいんです！　私も戦場に出るときがあるでしょう。その時にもう誰も失うことのない力が欲しいんです！」

「……………」

まりもさんはテーブルから身を乗り出してそう言った。

なんという熱意。すごいね、この世界の日本人。  
大和魂があるって言うか……俺の時代の奴ならこんなときでも死にたくないから戦場に出たくないとか言うんだろうな。

やばっ、感動して涙出てきた。って、あれ？　なんか口が勝手に……

「……失われたものは絶対に帰ってはこない」

「！」

「友人も、恩師も、家族も……みんな」

「ザ、ザラ中佐……………」

やべえ…………中2病が発病したかとオモタ。

これ、アスラン本人が喋ってるんだわ。頭の中に記憶が流れ込んでくる。

てか、アスランは意識があんのね……。何それ怖い。

でもなんていうか、邪魔ではないんだよね。一体感があるって言うか……。

……だけどさあ、いきなり出てきて話すのやめてほしいな。

ほら、まりもさん顔真っ赤にして涙目だよ。完全に笑うのこらえるよ。

ん？ お、やっと喋れる！

「あ、えっと……それを失うことのないようにと頑張る神宮寺軍曹に心打たれました！俺でなければいつでも付き合いますよ！今日なんてどうです？」

「……………わかりました。では私はお先に失礼します……………」

「え、あ、はい」

「それでは……………」

そこまで言つと走るに近い速さでまりもさんは行ってしまった。

そんなに中2病が面白かったんですか？ ……今頃大爆笑してんだろうな。鬱だ。

「あ、いた！ 中佐、今日も私の相手してよね！」

「ちょ、水月！ 中佐、おはようございます！」

俺がそう思っていると悪魔速瀬さんと天使涼宮さんが現れた。

「……不幸だ」 某フラグメーカー

「はぁ……はぁ……」

私　神宮寺まりも　はアスランさんと別れてすぐにトイレに駆け込んだ。  
分かっていたはずなのに……。

『……失われたものは絶対に帰ってはこない』

アスランさんにそういう話をしてはいけないと分かっていたはずなのに……！

『友人も、恩師も、家族も……みんな』

渚さんだけでなく全てを失っているなんてこと……家族の話や友人の話をしない事から容易に分かったはずなのに……！

最低の人間ね……自分の事しか考えない最低の人間だわ。私。

「すみません……アスランさん……グスッ。私は……私は……」

私はしばらく1人で泣き続けた。そうすれば許してもらえそうな気がする。

「よし、準備はいいですか？」

今は夜。場所はシュミレータールーム。

俺 アスラン・ザラ は向こうに乗っているまりもさんに声をかけた。

『はい。いつでもいいです』

俺が聞くとまりもさんは真剣な面持ちでそう答えた。

……どうやらかなり気合が入っているようだ。

「では、ヴォールク・データ始めますよ！」

『了解！』

始めると同時に俺とまりもさんの駆る不知火はハイヴに突入した。

俺が先行しまりもさんが中々遠距離を取るフォーメーションで。

「まりもさん！ 前方からBETA！ 行きますよ！！」

『了解！！』



俺はまりもさんの返事を聞くと一気に水平噴射をしてBETAの  
群に突っ込む。

そしてそのまま長刀を取り出し、一体の突撃級を切り裂く。

『援護します！』

まりもさんはそう言う銃を撃ちながらこちらに走ってくる。  
それに気を取られたBETAを切り裂く。

「まりもさん！ このまま目の前の敵だけ潰して極力武装の消費を  
避けましょう！！」

『了解しました！ 先行はお任せします！』

まりもさんの返事を聞いて俺は不知火カスタムを前に向けた。

すごい……と、私　神宮寺まりも　は思った。

圧倒的な機動、そして操縦技術。

一体今まで私が見てきた衛士は何だったんだろう？  
そう思わずにはいられなかった。

『まりもさん！　前方よりまたBETAの大群！！』

「え、あ、了解！」

アスランさんの声に反応する。

するとアスランさんはまた水平噴射をして単騎で敵地のど真ん中に  
躍り出る。

……正直、私はいらない気がする。

そんな事を考えるほどに華麗だった。

ネックなのは武装の量。

多分、一機か二機位の補給専用の戦術機でも作れば直ぐにハイヴを  
攻略してしまうのではないか？

その考えは、素直に憧れと尊敬の意であった。

『まりもさん？ どうしました、どこか不具合でもありましたか？』

「あ、だ、大丈夫です！」

アスランさんの駆る不知火カスタムは未だBETAの大群に囲まれている。

その中でこんなにも余裕を持って私の気遣いをする。

……どうしてここまで違うのか？ どうしてこんなにも強いのか？

失ってきたものが違う。

背負ってきたものが違う。

そういうことなのかしら……。

『まりもさん！ 数が多くてキリがありません！ ここは一気に突き抜けましょう！』

「了解！」

考えていても始まらない。

今は着いていこう、この人に。

きっとそうすれば……世界は、人類は救われるはずだから。

そう思っただけ私は不知火を全速で跳ばした。

「まったく…… B E T A の数は底なしですね！」

俺 アスラン・ザラ はそう愚痴る。

なんとかかさっきの B E T A の大群から逃げ切った俺とまりもさんは併走してハイヴの中を進んでいる。

恐らく階層的には最下層まで来ているんじゃないかと思う。

『ふふふ……ですがアスランさんの技量だともう少し多くてもいいんじゃないんですか？』

「ははは……過大評価しすぎですよ」

『アスランさんは自分を過小評価しすぎですよ』

俺の言葉に少し含みを入れて返すまりもさん。

どうやら緊張はとれたみたいだ。

始まったばかりの時は全然喋れてなかったけどこうして少し笑いを入れた会話もできるようになった。

「ならまりもさんも自分を過小評価しすぎですよ」

『そんなことはありません……アスランさんには遠く及びません』

俺の言葉にまりもさんはそう返した。

正直に言おう……まりもさんはかなり凄いと。

精密な射撃に冷静な近接戦闘。

実力的には伊隅さんと同等か、勘を取り戻せばそれ以上かもしれない。

「まったく……まりもさんは……」

俺はまりもさんにあなたも凄いですよと言おうとしたが、

ピーッ、ピーッピーッ！

警告音に遮られてしまった。

見ると今までの比じゃない量のBETAの大群が迫っていた。

「まだ来るか……まりもさん！ 恐らくこれが最後です！ 気を引き締めていきましょう！」

『了解！』

まりもさんの返事を聞いて俺はかなりのスピードで銃を乱射しながら敵陣に突っ込む。

その後ろからまりもさんの援護射撃が来る。

「頼もしいね、まったく！」

そう叫んで俺は弾の無くなった銃を捨て、長刀を取りだす。そのまま目の前にいた小型種を薙いでいく。

『アスランさん！ 二時の方向より突撃級！ 気をつけてください！』

「了解！」

まりもさんの助言を受け、そちらの迎撃に回る。  
そこにいた大型種の攻撃をかわし、背中から斬りつける。  
そのまま奥に進む。

『小型はこちらで潰します！ アスランさんはそれ以外をお願いします！』

「了解！ やってやりますよ！」

俺はそう言つと片手に短刀、もう片手には長刀を握りしめる。  
残りの推進剤ももう残り少し。  
ならまあ……やってやりますか。

「BETAよ！ お前たちには足りないものがある！」

『ア、アスランさん？』

俺の言葉にまりもさんは驚いて通信を入れてくるが無視をする。  
ごめんなさい……今はこのままのらせてください。

「お前たちに足りないもの！ それは！」

俺はそう言つと一か所に固まっているBETAの大群にフルスピ  
ドで突っ込む。

そしてすれ違いざまに切り裂いていく。

「情熱、思想、理念、頭脳、気品、優雅さ、勤勉さ！」

どんどん不知火カスタムの後ろでBETAが絶命していく。  
そして俺は最後の突撃級に突っ込む。

「そしてなによりもおおお！！！」

俺はそう叫び長刀を振り上げ

「速さが足りない！！！！！」

切り裂いた。

その瞬間、俺の後ろで数えきれない量のBETAが一気に倒れた。

リーダーを見る。

BETAの反応……ゼロ。

そして目の前に見えるのは……



『反応……炉』

「はぁ……はぁ……やりましたね、まりもさん！」

『……………』

だが俺の声に反応は無く、沈黙が訪れる。  
あるえー？ どうしたの？

『やり……ました。やりました！ アスランさん！ 反応炉に！  
反応炉に到達したんです！！』

その沈黙を破ったのは泣きながら大声で喜ぶまりもさんの声だった。

「ええ！ やったんですよ！ 俺たち、たった2機で！！」

まりもさんの声につられ、俺の声も自然と弾む。

この日は俺とまりもさんにとって忘れられない日になる……  
…と、俺は思った。



第10話 野生のアスランが現れた！（後書き）

〈感謝〉

デスティニープラン様、アルベルト様、七夜様、マサト様、感想、  
アイディアありがとうございます！！

〈一言〉

誤字脱字、ここがおかしいまたはここが良かったなどありましたら  
感想かメッセージにどうぞ

第11話 噂を噂と見抜けない奴は（前書き）

遅くなってごめんなさい！

あとマジで久々に書いたので酷い事になってます！  
注意してください！

## 第11話 噂を噂と見抜けない奴は

10月27日 午前

「うゝ、ガンダムガンダム！」

今、ガンダムを求めて全力疾走している僕は国連軍に所属するごく一般的な衛士。

強いて違つとこをあげるとすればガンダムが大好きってことかな……。

名前はアスラン・ザラ。

そんなわけで機体の置いてあるハンガーにやってきたのだ。

「ハッ！？」

ふと見ると、ハンガーに一体の灰色のガンダムが布をかぶってたたずんでいた。

「ウホッ！ いいガンダム……」

……と言う事で早速搭乗。勿論、夕呼さんから許可は得てるよ。

うゝむ……相変わらずガンダムのコックピットは良いなあ。戦術機もいいけどさ。なんて言うか俺にはこっちが合ってるんだよね。コンソール開いて……うんうん、良い感じ！ちゃんと整備してたみたいだね！

「これをこうして……油圧計が少しおかしいな」

愛機はこうして定期的に弄ないとなんか嫌だし。アスランの記憶があるからかもしれないけど、ジャステイスは特別なんだよ。よし、俺のテンションが最高潮になりそうだ。言わせていただくとガンダムファンとしてリアルガンダムに触れることは神に触れることと同意義だからな？

では……ガンダム！ ガンダム！ ガンダム！ ガンダムううううわあああああああああああああああああああん！！！！ああああああ……ああ……あつあつー！ あああああああ！！！！

ガンダムガンダムガンダムうううあわああああ！！！！ああクンカクンカ！ クンカクンカ！ スーハースーハー！ スーハースーハー！ いい匂いだなあ……くんくん。

んはあつ！ ジャステイスガンダムたんの淡い赤色の鋼鉄装甲をクンカクンカしたいお！ クンカクンカ！ あああ！！

間違えた！ モフモフしたいお！ モフモフ！ モフモフ！ 装甲

モフモフ！ カリカリモフモフ……きゅんきゅんきゅい！！

初発進のジャステイスたんかつこよかったよう！！ あああああ……

……あああ……あつあああああ！！ ふあああああんつ！！

アニメ活躍できて良かったねジャステイスたん！ ああああああ

！ かわいい！ ガンダムたん！ かつこいい！ あつあああああ！ コミック版も発売されて嬉し……いやああああああ！！！！ にや

あああああああん！！ ぎゃあああああああ！！  
ぐあああああああああ！！！！ コミックなんて現実じゃない！  
！！！！ あ…プラモもアニメもよく考えたら…  
ガンダムちゃん は 現実 じや ない？ にや  
ああああああああああああん！！ うあああああああああ！！  
そんなあああああああ！！ いやあああああああああ！！  
はあああああああん！！ コズミック・イラあああああ！！  
この！ ちきしょー！ やめてやる！！ 現実なんかやめ…て…  
…え！？ 乗っ……てる？ 本物のガンダムちゃんに僕が乗ってる？  
本物のガンダムちゃんに僕が乗ってるぞ！ ガンダムちゃんに僕が  
乗ってるぞ！ ガンダムのコンソールちゃんが僕を見てるぞ！！  
本物のガンダムちゃんが僕に乘られてるぞ！！！！ よかった…世  
の中まだまだ捨てたモンじゃないんだねっ！  
いやっほおおおおお！！！！ 僕にはガンダムちゃんがいる！  
！ やったよ力ガリ！！ ひとりでできるもん！！！！  
あ、コミックのジャスティスちゃあああああああああ！！！！  
！！！！ いやあああああああああ！！！！  
あっあんあっああんあ初代様ああ！！！！ ぜ、ゼータあ！！！！ ダブ  
ルゼータあああああ！！！！ ガンダム様あああ！！！！  
うっうっうっ！！！！ 俺の想いよ全ガンダムへ届け！！！！ 全ての世  
界の全てのガンダムへ届け！！

「……………終わった」

興奮状態で作業したからか、アツと言う間に調整が終了してしまっ  
た。

結局、油圧計以外どこもおかしくなかった。嬉しい反面、寂しくも  
ある。あれだよ、息子が独り立ちした感じ。いや、息子居ないから

わかんないけどね。  
でもさ、いいじゃん。愛でたって。俺の愛機なんだよ、ジャスティスは。

「よし、今日も一日頑張っか〜！」

うん、気合も入ったことだし、飯でも食いに行くか！

「あ、神宮寺軍曹！ おはようございますー！」



「あ、ザラ中佐。おはようございます。一緒にしてよろしいですか？」

PXで朝食中にいきなりの幸運。まさか運良くまりもさんに会えるなんて。今日はちよつと遅くなったから会えないと思ってたよ。

しかも俺の挨拶にこんな笑顔で返してくれるなんて……天使やあ。

まりもさんマジ天使。

おっと、ここは紳士らしく椅子を引いてやらねば！

「どうぞどうぞ、ささ、お座りになってください」

「そ、そこまでしなくても良いですよ」

ありや、逆に気を使わせちゃったか。慌てて座っちゃった。

ま、いつか。まりもさんと食事ができるんだし！

「昨日はおつかれさまでした。神宮寺軍曹の機動には驚かされましたよ」

二人で食事を初めて数分、一息ついたところで俺は昨日の話題を振った。

まりもさんもちよつと食事が終わったようで、箸を置きながら口を開いた。

「そんな……ザラ中佐はお世辞が過ぎますよ。私なんて足元にも……」

……思っただけど、なんでまりもさんはこんなに自信が無いの？  
ぶっちゃけた話、この人レベルなら普通にエースになれるよ。  
謙遜が美学なんて日本だけです。あ、でもこの日本は違うのかな？

「なら神宮寺軍曹は謙遜が過ぎますよ。あなたがそんなこと言ったら嫌味になっちゃいますよ？」

「そ、そうでしょうか……（も、もしかして……認められた……？）」「

「そうですよ！ 神宮寺軍曹となら俺、地球を守れちゃいそうですよ！」

「う、嬉しいです……（や、やっぱり！ あのアスランさんに……！」

少し照れくさそうに笑いながら俯くまりもさん。いやー……可愛いね。そして美しい。

でもこれ本気で言ってるから。アスランの記憶の中を見ても、まりもさん程のパイロットなんて数える程度しかないよ。  
天賦の才か……それとも努力の賜物か……。どっちにしても、人間って追い詰められると凄い力発揮するね。

……ん？　なんか周りからの視線が……。それに小声の話声も……。

「ほら、あれがザラ中佐よ……」

「ヴォールク・データを神宮寺軍曹と二人でクリアしたって言う！？」

左から若い女性の声。

「二人でヴォールク・データって……本当なのかよ……」

「本当なんだって！　今朝、副司令が言ってたんだよ！　確定情報だ！」

右からは若い男性の声。

実は昨日、まりもさんとの訓練の後、ログを夕呼さんに提出しに行ってたんだ。

あの時の夕呼さんの顔は見物だったな。あの夕呼さんが目を見開いて驚いてさ。

色々ブツブツ言ってたけど……なんで夕呼さんはバラしたし。戦意

高揚？

あゝ……視線が痛い。この場に居辛い。……さっさとPXから出よう。

「神宮寺軍曹、そろそろ行きませんか？」

「……………（やったわ……………いやでも、もっと頑張らないと……………）」

「あ、あの？ 神宮寺軍曹？」

「え、あ、はい！ な、なんですか！？」

何か考え事してたのかな？ 兎に角、顔を上げたまりもさんに「周りを見てください」とジェスチャーを送る。

…… やつと気付いたみたいだ。まりもさんも居辛そうにしてる。でもなんか若干嬉しそうだな。どうしたんだろ。やっぱりヴォールク・データ攻略のことを誇りに思ってるんだろうか。

「ここ出ましようか」

「そうですね……………」

結局、そのまま時間が来たとのことでもうさんと別れることになった。

あ、でも今日も戦術機指南と言う名の合同訓練の約束を取ったよ。やったねアスラン！ 仲間が増えるよ！ …… おいやめろ。

「コールサイン、ですか？」

今俺が居る所は執務室。夕呼さんの部屋だ。

昨日の内に呼び出しを喰らってたんだ。いや、別に悪いことした訳じゃないよ？

ああ、呼び出されたついでに今朝の事を聞いたんだ。何でヴォールク・データの事を流したのかって。

そしたら案の定、「戦意高揚の為」だってさ。でも、みんなから期待されるのは嬉しいね。俺の力じゃないけど。

で話を戻すけど、夕呼さんに呼び出した理由を聞いたら、「コールサインを決めておけ」とのことだ。

「そう、コールサインよ。部隊や無線が混同しない様にさっさと決めて頂戴」

相変わらずソファーに座りながら優雅にコーヒーを飲む夕呼さん。組んでいる足が途轍もなく色っぽい。

それにしても……コールサインか……。そんなのも考えなきゃいけないのか。何が良いかなあ……。

「夕呼さん親衛隊とかどうですか!」

「殴らりたいの?」

「ああん、ひどうい……」

某兄貴の声を頑張って出してみる。

というか夕呼さん、目がマジですって！ でも悔しい！ 殴られた  
い！ ビクンッビクンッ。

そもそも俺にそんなことを決めさせるのが間違ってるんだって。俺  
のネーミングセンスの無さ舐めんなよ。

ジャステイスとか？ いや、ガンダムとごっちゃになっちゃうな。

フリーダム？ デステイニー？ レジェンド？ …………… 違うな。

幻想郷部隊とか…………… ねえわ。第8レスリング小隊とか…………… これもね  
えわな。だいたい、俺って一機だけだから隊でもないしね。

…………… ああ！！ あった！ 良い思い出したよ！！ これなら  
カッコいいし、俺の戦意も高揚する！！

「夕呼さん！」

「ん？ 決まったの？」

「メビウス1（M o b i u s 1）なんてどうでしょう！」

そう、エースコンバ ト04の主人公であり、メチャクチャ強いエ  
ースの中のエース！

最後の方には僚機が居たけど、殆どたった一人で戦ってた英雄だ！  
あれはマジで男の子の心をくすぐる。もうほんとに興奮したね。

「メビウス…………… 数学者の名前ね。あとは無限とか終わりなき…………… つ  
て意味」

「そ、そうですその通りです！　良くないですか！？　隊章も考えてあるんです！」

し、知らなかった……。そんな意味あったのか。ヤダ、恥ずかしい。隊章は勿論エー　コンバット04のメビウスのやつだよ。

厨二？　おいこら、今エース　ンバット厨二って言った奴表出る。

「良いんじゃない？　それじゃあ今日からあんたはメビウス1ね。シュミレーターの中からそう心がけなさい。隊章はあとであたしに原案でも持って来て頂戴」

「ありがとうございます！　あ、夕呼さん。一つお願いしていいですか？」

「なによ？」

「『リボン付きの死神』って通り名が俺にあっただって事にしてもらえますか？」

これはメビウス1の通り名だ。

やっぱり自分に通る名があるとヤル気出るよね。

他にはラースグリーズの亡霊や円卓の鬼神とか色々あるけど、あれってみんな部隊名違うしなあ。



「……………なんでよ?」

うわ、夕呼さんの顔が面倒くさそうに歪んでる!

ここで俺の為、とか言ったら拒否される気がする。と言つか殺される気がする。

だがしかし!　こればかりは成し遂げたいんだ!　夕呼さんには悪いけど!!

「勿論、戦意高揚の為ですよ。俺だけでなく、横浜基地全体の」

「……………と言つと?」

「夕呼さんも今朝やつたじゃないですか。ああいうのですよ。同じ基地には凄い奴が居る!　って思わせるんです。勝気な奴なら俺に負けまいと訓練に身が入るでしょうし、弱気な奴はそんな奴が居るなら死なずに済むかもと緊張がとけるでしょう。どっちにしても良い事尽くめですよ!」

嘘はいけないよ。だけどこれには少しばかりの本心も入ってるから良いと思うんだ。

え?　だめ?　……………救いは無いんですか!

でも夕呼さんのことだから簡単に嘘と見抜いてきそう。ビビるわあ。

「……わかったわ。あんたの言う事も一理あるしね。そこまで言うならやつといてあげる。その程度の情報操作なら簡単よ」

「え、あ、ありがとうございます!」

まさかの展開。夕呼さんが了承してくれた! やったねアスラン! 厨二が認められたよ! ……だからやめろって。

それにしても、夕呼さんの割にはあっさり認めてくれたな。もっと疑り深い人だと思ってたのに。  
くそ、結婚したいぜ!

「それじゃあ話は終わりよ。さっさと出て行きなさい」

「ああん、ひどうい……」

「それ、流行ってんの?」

いや、出て行けと言われたからには出て行くけどな。夕呼さんの仕事のじゃましても悪いし。

「いえ、それでは失礼しました! 夕呼さんもお仕事頑張ってください」

さい！」

「はいはい」

夕呼さんの面倒くさそうな返事を聞きながら部屋から躍り出る。うん、リアルに踊ってた。

さあこのテンションをキープしたままシュミレーターだ！今日は頑張れそうな気がするぜ！

……………この日、俺はまりもさんとの合同訓練で彼女が息絶え絶えになるまで戦ってしまった。

「夕呼さんも今朝やったじゃないですか」

あたし 香月 夕呼 に、そうアスランは言った。

今朝やった事。それはこの質の低い横浜基地の戦意を、少しでも高揚させようとヴォールク・データの事を流した事。

でも、それが一体なんだって言うの？

「同じ基地には凄い奴が居る！ って思わせるんです。勝気な奴なら俺に負けまいと訓練に身が入るでしょうし、弱気な奴はそんな奴が居るなら死なずに済むかもと緊張がとけるでしょう。どっちにしても良い事尽くめですよ！」

正直、驚いた。

少しは自分の為もあるのだろう。通り名と言う物は少なからず自身の戦意を高揚させる。

だけど、ここまで他人の事を思っている者が居るだろうか。

そう言えば、噂で聞いていたわ。アスランがシュミレータールームで他の衛士の事を観察していると。

だれがどんな戦闘をするのか。どんな性格なのか。そうやって見てきたからこそ、こんなことが言えるのだろう。

現に、あいつの目は必死だ。なんでそんなに誰かの為に必死になれるの？ どうしてそこまでできるの？ 聞いてみたいけど、今のあたしにそんな権利は無い。

「……わかったわ。あんたの言う事も一理あるしね。そこまで言うならやっというてあげる。その程度の情報操作なら簡単よ」

「え、あ、ありがとうございます!」

「ただ、そんなことは考えていません」とても言いたいかの様に無邪気な笑顔を見せてくる。

「何でこいつはこんなに……アスランは一体何を見てきたって言うの？」

「まったく……興味が尽きないわね。次の研究材料にしてやろうかしら。」

「……その前にやることも多いのだけだね。」

## 第11話 噂を噂と見抜けない奴は（後書き）

たくさんの方々、アイデアどうもありがとうございました！  
参考にさせていただきます！

隊章が何のことかわからない人は、メビウス1でgggと幸せになれるかも。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2219m/>

---

Muv-luvに來た転生者（笑）

2011年8月21日21時00分発行